

白老町

ポニアヨロ4遺跡

一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成15年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が行う、一般国道36号登別市登別拡幅工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成15年度に実施した白老町ポニアヨロ4遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の地番は北海道白老郡白老町字虎杖浜^{ほっかいどうしらおいぐんしらおいちやうあざこじやうはま}335-27ほかである。
3. 調査は第1調査部第4調査課が担当した。
4. 本書の執筆は、遠藤香澄（Ⅰ-3、Ⅲ-1）、芝田直人（Ⅱ、Ⅲ-6、Ⅳ、Ⅴ）、山中文雄（Ⅰ-1・2・4、Ⅲ-2～5）が行い、編集は山中文雄が担当した。
5. 遺物の整理は芝田直人が担当した。
6. 室内での遺物撮影は、第1調査部第4調査課 笠原 興が担当した。
7. 石器等の石質鑑定は芝田直人が行った。
8. 調査報告終了後の出土遺物については、白老町教育委員会が保管する。
9. 調査にあたっては下記の諸機関および諸氏に御協力、御指導を頂いた（順不同、敬称略）。
北海道教育委員会、白老町教育委員会、仙台藩白老元陣屋資料館 武永 真、登別市教育委員会 土門和宏

記号等の説明

1. 図中の方位は磁北を表す。
2. 土層は、台地部分についてはローマ数字で、氾濫原部分についてはイ・ロ・ハで表している。
3. テフラ（火山砕屑物の総称）については以下の略号を用いた箇所がある。
 - Us-b : 有珠bテフラ
 - B-Tm : 白頭山-苫小牧テフラ
 - Ko-g : 駒ヶ岳 g テフラ
4. 土器拓影図、石器等実測図の縮尺は以下のとおりである。
 - 土器拓影図 1 : 3
 - 剥片石器 1 : 2
 - 礫石器 1 : 3
 - 板状礫 1 : 4
5. 石器等の大きさは「最大長」・「最大幅」・「最大厚」（単位cm）で記し、破損しているものについては（ ）を付してある。実測図中の「V-V」はたたき痕、「|ー|」はすり痕の範囲である。

目 次

例 言
記号等の説明
目 次
挿図目次
表 目 次
図版目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	3
4 調査結果の概要	5
II 遺跡の位置と歴史的環境	7
1 遺跡の位置と地形	7
2 先史時代の虎杖浜	7
3 アイヌ語地名	9
4 近世以降の虎杖浜	13
III 調査の方法	15
1 グリッドの設定	15
2 土層の区分	16
3 発掘調査の方法	18
4 遺物整理の方法	18
5 遺物・記録類の保管	18
6 遺物の分類	20
IV 包含層出土の遺物	21
1 概 要	21
2 土 器	21
3 石 器	23
V ま と め	27

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

I 調査の概要	図III-1 グリッド設定図 ……………15
図I-1 白老町と遺跡の位置 …………… 1	図III-2 土層断面図（氾濫原～台地） ……17
図I-2 遺跡周辺の地形と調査区 …………… 2	図III-3 トレンチ位置図 ……………18
図I-3 遺構位置図 …………… 4	図III-4 土層断面図（氾濫原） ……………19
II 遺跡の位置と歴史的環境	IV 包含層出土の遺物
図II-1 遺跡の位置 …………… 8	図IV-1 包含層出土遺物の分布 ……………21
図II-2 周辺の遺跡 ……………11	図IV-2 包含層出土の土器 ……………22
図II-3 「ボンアヨロ附近説明」図 ……………13	図IV-3 包含層出土の石器等（1） ……24
III 調査の方法	図IV-4 包含層出土の石器等（2） ……25

表目次

I 調査の概要	III 調査の方法
表I-1 一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内 埋蔵文化財発掘調査年度別面積一覧 …… 6	表III-1 年度別土器分類対照表 ……………20
表I-2 検出遺構一覧（平成10年度） …… 6	IV 包含層出土の遺物
表I-3 出土遺物点数一覧 …………… 6	表IV-1 層位別出土遺物点数一覧 ……………26
II 遺跡の位置と歴史的環境	表IV-2 掲載土器一覧 ……………26
表II-1 周辺の遺跡一覧 ……………10	表IV-3 掲載石器等一覧 ……………26

図版目次

図版1 遺跡周辺の空中写真	図版4-3 斜面～氾濫原部分（Gライン）土層断面 （南西から）
図版2-1 調査区（Us-b等除去後）全景（北西から）	図版4-4 Aトレンチ（北西から）
図版2-2 調査区（Us-b等除去後）全景（南東から）	図版4-5 Cトレンチ（南東から）
図版3-1 調査状況（北西から）	図版4-6 Eトレンチ（南東から）
図版3-2 IVb層土器出土状況（西から）	図版4-7 Fトレンチ（南東から）
図版3-3 板状礫出土状況（南から）	図版5-1 調査区（調査終了後）全景（北西から）
図版3-4 台地部分（Iライン）土層断面（南東から）	図版5-2 調査区（調査終了後）全景（南東から）
図版3-5 台地部分（Gライン）土層断面（南東から）	図版6 包含層出土の土器（1）
図版4-1 氾濫原部分（I-5 杭付近）土層断面 （南東から）	図版7 包含層出土の土器（2）・石器等（1）
図版4-2 氾濫原部分（Iライン）土層断面（南西から）	図版8 包含層出土の石器等（2）

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名：ポンアヨロ4遺跡（北海道教育委員会登録番号：J-10-41）
所在地：白老郡白老町字虎杖浜335-27ほか
調査面積：284㎡
受託期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日
発掘期間：平成15年6月9日～7月18日
整理期間：平成15年11月4日～平成16年3月31日

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター
理事長 森重 楯一
専務理事 宮崎 勝
常務理事 畑 宏明（第1調査部長兼務）
第1調査部第4調査課長 遠藤 香澄（発掘担当者）
主任 芝田 直人（発掘担当者）
文化財保護主事 山中 文雄（発掘担当者）

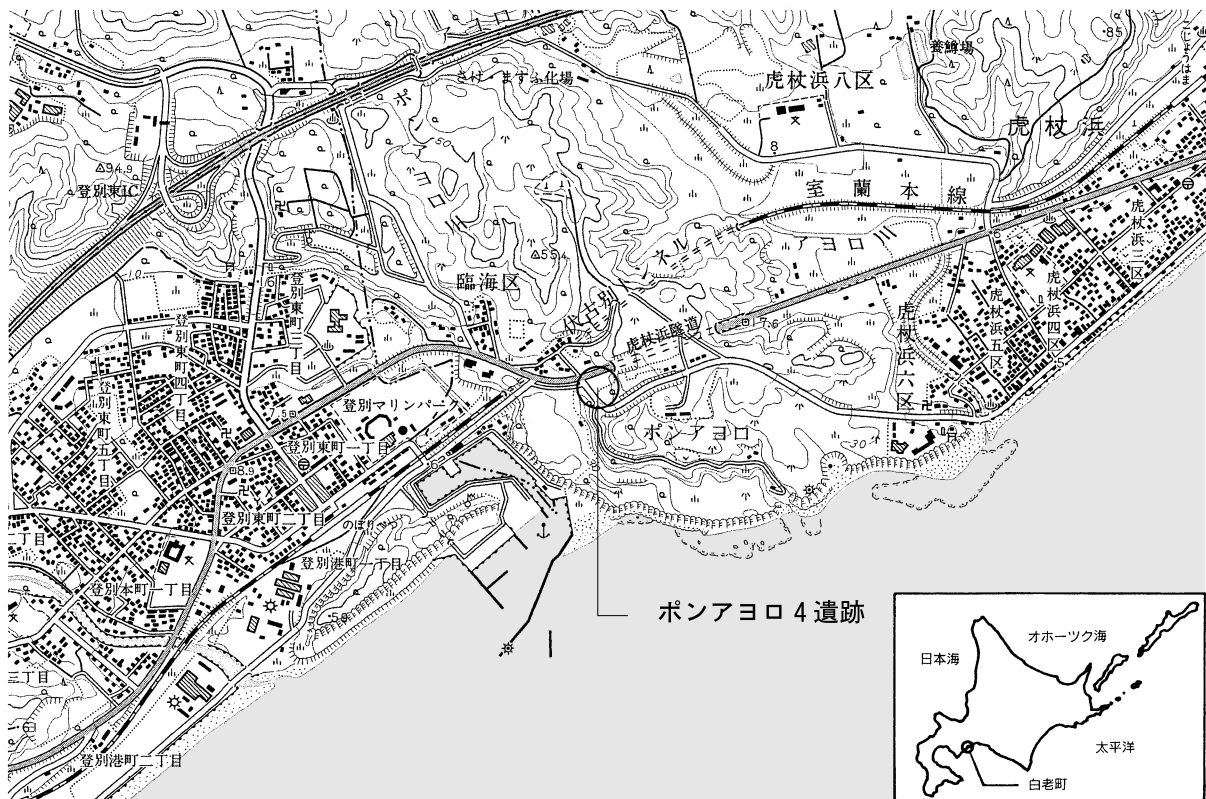


図 I-1 白老町と遺跡の位置

(国土地理院発行の2.5万分の1地形図「登別温泉(平成13年)」を複製)

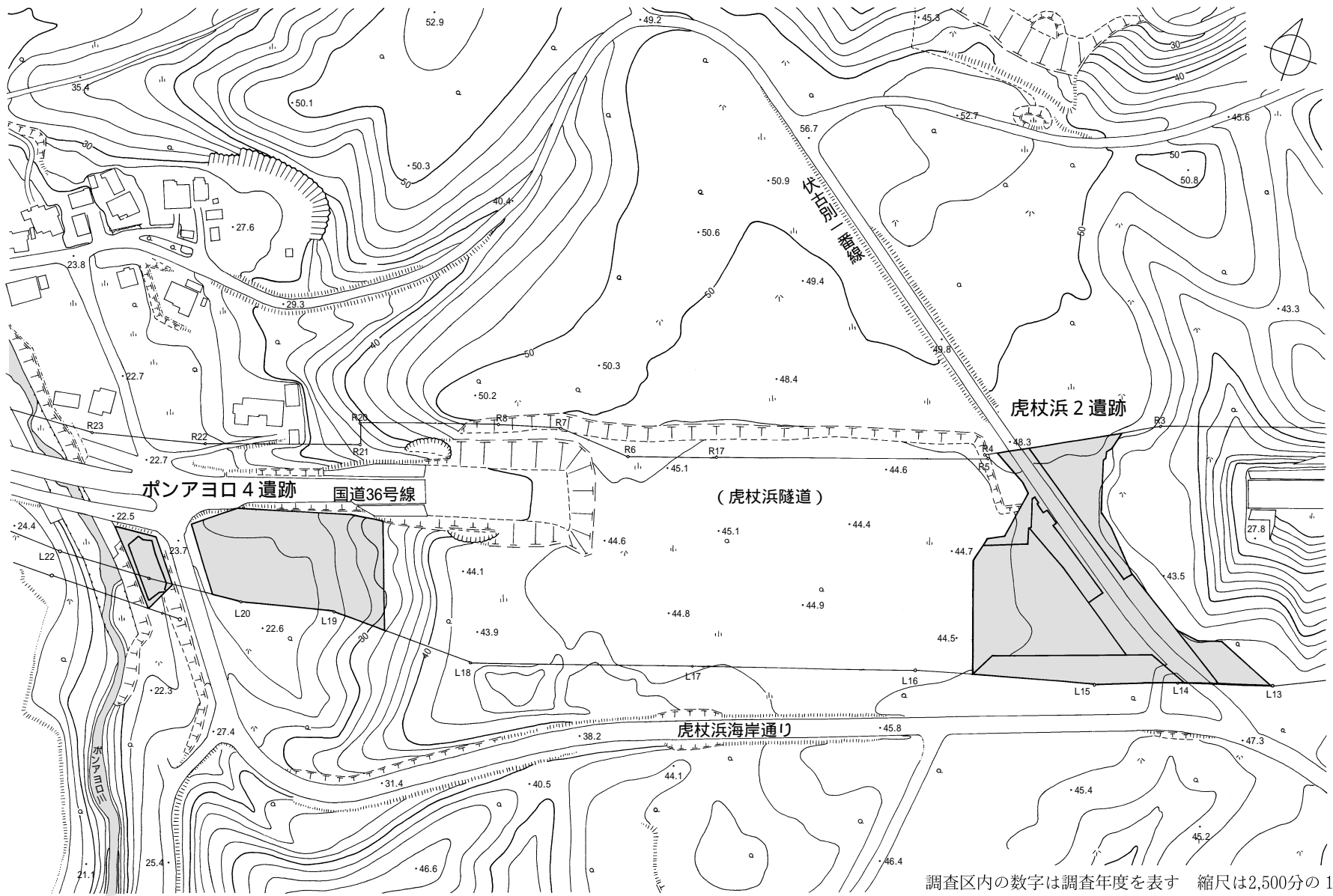


図 I - 2 遺跡周辺の地形と調査区

3 調査に至る経緯

国道36号登別拡幅工事は、北海道開発局室蘭開発建設部が行なう白老町字虎杖浜（JR虎杖浜駅前）から登別市本町に至る延長4.6kmの4車線拡幅事業である。国道36号は札幌市と室蘭市を結ぶ、実延長133.7kmの一般国道である。沿線に新千歳空港、特定重要湾港の苫小牧港・室蘭港など交通と物流の拠点をもつ北海道の大動脈である。

虎杖浜隧道（以下虎杖浜トンネル）は白老町の南西部、登別市との境界付近に昭和34年に竣工された。それまでの大きくカーブした国道を直線化したことにより利便性は高まったが、竣工から20年を過ぎた昭和55年頃から、交通量の増加に伴いトンネル周辺での交通事故が多発し、周辺住民にとっては深刻な問題となっていた。昭和60年には国道改善促進期成会が組織され、それ以後、交通網整備の充実と狭小トンネル解消の陳情が繰り返し行われてきた。

このような気運のなか、平成元年、北海道開発局室蘭開発建設部は国道の4車線化とトンネル部分の台地を掘削しオープンカットに切替える計画を発表した。当初の事業区間は白老町JR虎杖浜駅前から虎杖浜トンネルを含む登別市との境界までの3kmである。拡幅事業は同年から着手され、平成14年度まで用地補償、改良・橋梁・舗装工事が進められ、白老町と登別市内の2ヵ所延長0.7kmについて4車線化が完了し供用されている。

この工事にかかる埋蔵文化財調査については、室蘭開発建設部と北海道教育委員会（以下道教委）、白老町教育委員会の三者で、いち早く虎杖浜2遺跡（道教委登録番号J-10-1）について事前調査の協議がなされている。虎杖浜トンネル上の北側台地に「貝塚」が存在することは古くから知られていたのである。その後、平成2年の範囲確認調査（道教委）、平成9年の試掘調査（白老町教育委員会）を経て、平成9年に第一次の発掘調査が白老町教育委員会により実施され、縄文早期、前期の土坑や焼土跡が検出されている（工藤1999）。第二次以降の発掘調査は、（財）北海道埋蔵文化財センターが引き継ぎ、平成11年から平成13年までの3年間で6,510㎡について調査を実施（表I-1）、縄文時代前期後半（円筒下層式期）の貝塚を伴う集落跡の様相が明らかになっている（北埋文2001・2002）。

ボンアヨロ4遺跡は平成9年6月9日～13日に道教委文化課により実施された遺跡所在および範囲確認試掘調査で新たに発見された遺跡である。この試掘調査は虎杖浜トンネル西端からボンアヨロ川河川敷まで、海側の町道虎杖浜海岸道通り（旧国道36号）と現国道に挟まれた工事計画路線内が対象で、南北方向に4ヵ所、東西方向に2ヵ所の合わせて6ヵ所のトレンチおよび1ヵ所のテストピットが掘削された（工藤1999の第1-8図参照）。トレンチは幅1m、総延長は213mで、住居跡3軒、土坑2基、柱穴13個、焼土4ヵ所等の遺構と土器217点、石器18点、フレイク・礫等137点が検出されている。遺構・遺物ともにBトレンチ（平成10年度調査区のDライン、14～24ライン間）からの検出が際立っている。土器は縄文時代早期から後期初頭まで各時期のものが認められ、なかでも中期中葉～後葉に属するものが最も多く、次いで早期後半中茶路式があり、遺構はこれらと同時期であることが推測された。このような試掘結果から、4,845㎡が工事に先立って事前調査の必要な範囲とされた。このうち、町道虎杖浜海岸通り以西ボンアヨロ川までの範囲（今年度調査範囲の一部）については、用地の条件が整わなかったことから手掘りによるテストピット1ヵ所に留まっている。遺構・遺物は検出されていないが、包蔵地が広がる可能性が高いことから、工事に際しては再度事前の範囲確認調査が必要であると判断された。

第一次と呼べる発掘調査は、平成10年5月～10月に白老町教育委員会により実施された。調査範囲は遺跡の東端から町道虎杖浜海岸通りまでの3,500㎡、標高20m～30mの台地南西向きの斜面にあたる。縄文時代早期後半（中茶路式～東釧路IV式期）の多数の焼土を伴う袋状土坑群、前期前半（静内

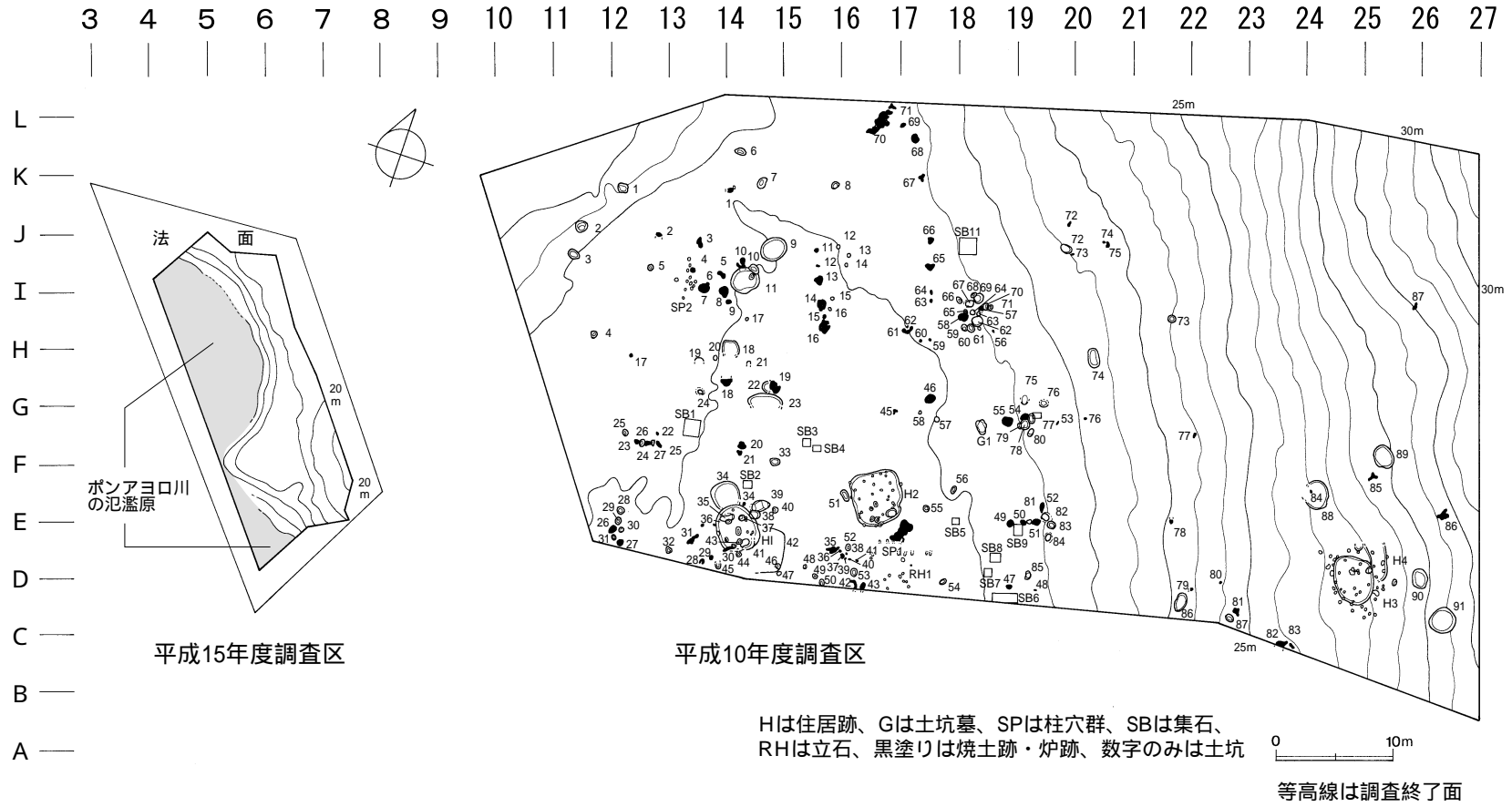


図 I - 3 遺構位置図

中野式期)の石皿破片の集石、中期後葉の住居跡・土坑群等199基の遺構と土器・石器合わせて30,505点が検出されている。ほかに縄文早期前半の貝殻文・沈線文土器群に伴う円孔文土器や円筒下層a式直前の白座式あるいは大木2式相当の資料等、少量ではあるが特筆すべき遺物も認められた(工藤1999)。

平成14年7月に至り、先に試掘が不十分だった遺跡西側の範囲について、用地条件が整ったことから、道教委文化課により再試掘調査が実施された。4本のトレンチが掘削され、そのうち3ヵ所から縄文土器が検出され、発掘調査が必要な範囲約1,300㎡が示された。

第二次にあたる平成15年度の調査は、(財)北海道埋蔵文化財センターが委託を受け、6月9日から7月18日までの日程で行なった。当初計画の面積はポニアヨロ1号橋と町道に挟まれた範囲900㎡であった。調査に着手すると包含層が予想以上の深度にあり、安全確保のために十分な法面を確保する必要が生じたこと、および現地での求積の結果、最終的な調査面積は284㎡となった。(遠藤香澄)

4 調査結果の概要

ポニアヨロ4遺跡は、白老町の南西部、虎杖浜地区に所在する。同地区には、クッタラ火山より噴出された軽石流等により、太平洋へ細長く延びる台地が形成されており、遺跡は台地を開析して流れるポニアヨロ川の左岸付近、現標高約20~30mの南西向き緩斜面にある(図I-1・2)。斜面を登りきると、現標高約45~50mの台地頂部となり、縄文時代前期の集落と貝塚で知られる虎杖浜2遺跡に至る。

平成10年度に行われた白老町教育委員会による調査(3,500㎡)では、縄文時代中期後半の住居跡4軒、同早期後半の土坑と焼土のまとまり10ヵ所などが検出されている(図I-3、表I-2)。後者についてやや説明を加えると、土坑は上部に比べ下部が張り出す形態であることから「袋状土坑」と呼称されており、植物質食料の貯蔵穴と考えられている。これら「袋状土坑」と焼土のまとまりが10ヵ所で認められたことなどから、両者が複合した施設の可能性について報告されている。遺物は土器11,992点、石器等18,513点が出土しており(表I-3)、とくに縄文時代早期後半の中茶路式土器が多いようである。

今年度は当センターによって、ポニアヨロ川の左岸部分284㎡について調査が行われた。調査区内の土層はI~VIに分けられ、このうちの有珠bテフラ層(1663年降下)より下位の黒色埴壤土層(IV層と呼称)が遺物包含層にあたる。IV層の中位には、駒ヶ岳gテフラ(「幌別黄橙色火山灰」)が部分的に認められ、それより下位(IVb層と呼称)で縄文時代早期の土器(中茶路式)等が出土している。なお調査区の西側は、ポニアヨロ川の旧河道や氾濫原となっており、IV層は確認されなかった。遺構は今回の調査区内では検出されていない。

遺物は1,190点出土している。土器は縄文時代早期の中茶路式が主体で、他に同じく早期の物見台式、東釧路Ⅱ式、中期の円筒土器上層式、北筒式、余市式が少数見られる。石器等はわずかで、スクレイパー、たたき石、すり石、石皿、黒曜石製の剥片、凝灰岩の大きな板状礫がある。(山中文雄)

表 I - 1 一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内埋蔵文化財発掘調査年度別面積一覧

遺 跡 名	平成 9 年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成15年度	合 計
虎 杖 浜 2	1,010		2,500	2,000	2,010		7,520
ボンアヨロ 4		3,500				284	3,784
合 計	1,010	3,500	2,500	2,000	2,010	284	11,304

単位は㎡

表 I - 2 検出遺構一覧（平成10年度）

住居跡	土坑墓	土 坑	焼土跡	柱穴群	集 石	その他	合 計
4	1	91	87	2	11	3	199

今年度の調査区内で遺構は検出されていない

表 I - 3 出土遺物点数一覧

年 度	出土位置	土 器	土製品	石 器	石製品	礫	その他	総 計
平成10年度	遺 構	715	5	3,318	0	341	0	4,379
	包含層	11,277	22	8,389	3	6,406	29	26,126
	小 計	11,992	27	11,707	3	6,747	29	30,505
平成15年度	遺 構	0	0	0	0	0	0	0
	包含層	1,021	0	16	0	153	0	1,190
	小 計	1,021	0	16	0	153	0	1,190
総 計		13,013	27	11,723	3	6,900	29	31,695

平成10年度の「剥片」・「石片」は石器にまとめて集計した

Ⅱ 遺跡の位置と歴史的環境

1 遺跡の位置と地形

白老町は北海道胆振地方の中央部に位置する。ポンアヨロ 4 遺跡は白老町の南西部、登別市に隣接する虎杖浜地区にある。

白老町の海岸線は直線的な砂浜である。これは門別町のシノタイ岬から室蘭市の地球岬までの弧状の海岸線の一部である。ところが、白老町の南端部付近では砂浜が途切れ、断崖が剥き出しになっており、岩石海岸（磯）もみられる。この断崖や岩石海岸は 4 年以上前にクッタラ火山が爆発して溶岩流が流出したものに由来するという。現在、海岸より北へ約 4 km の距離に、このときの火山活動によって形成されたカルデラ（倶多楽湖）がある。

倶多楽湖の外輪山南縁から、軽石流等により形成された倶多楽台地が太平洋へと延びている。この台地を開析してアヨロ川とポンアヨロ川が流れている。アヨロ川の両岸は比較的平坦な沖積地で、住宅地等に利用されているが、ポンアヨロ川の両岸は傾斜のきつい部分が多く、いくつかの谷が入り組んだ地形となっている（図Ⅱ-1）。

遺跡はポンアヨロ川の左岸、標高 20~30m の南西向き緩斜面に立地する。地形を詳しく見ると、東側は台地の頂部から続く緩やかな斜面で、中央から南西にかけて比較的平坦な部分が広がり、北西~西側はポンアヨロ川に接する急斜面となっている。

2 先史時代の虎杖浜

現在白老町内で 43 ヲ所の遺跡が周知されており、そのほぼ半数にあたる 21 ヲ所が虎杖浜地区に所在する（図Ⅱ-2、表Ⅱ-1）。これらは縄文時代に属するものが大半を占め、複数時期にわたって営まれた例も見られる。以下、時代・時期別に遺跡の特色を記す。

縄文時代早期

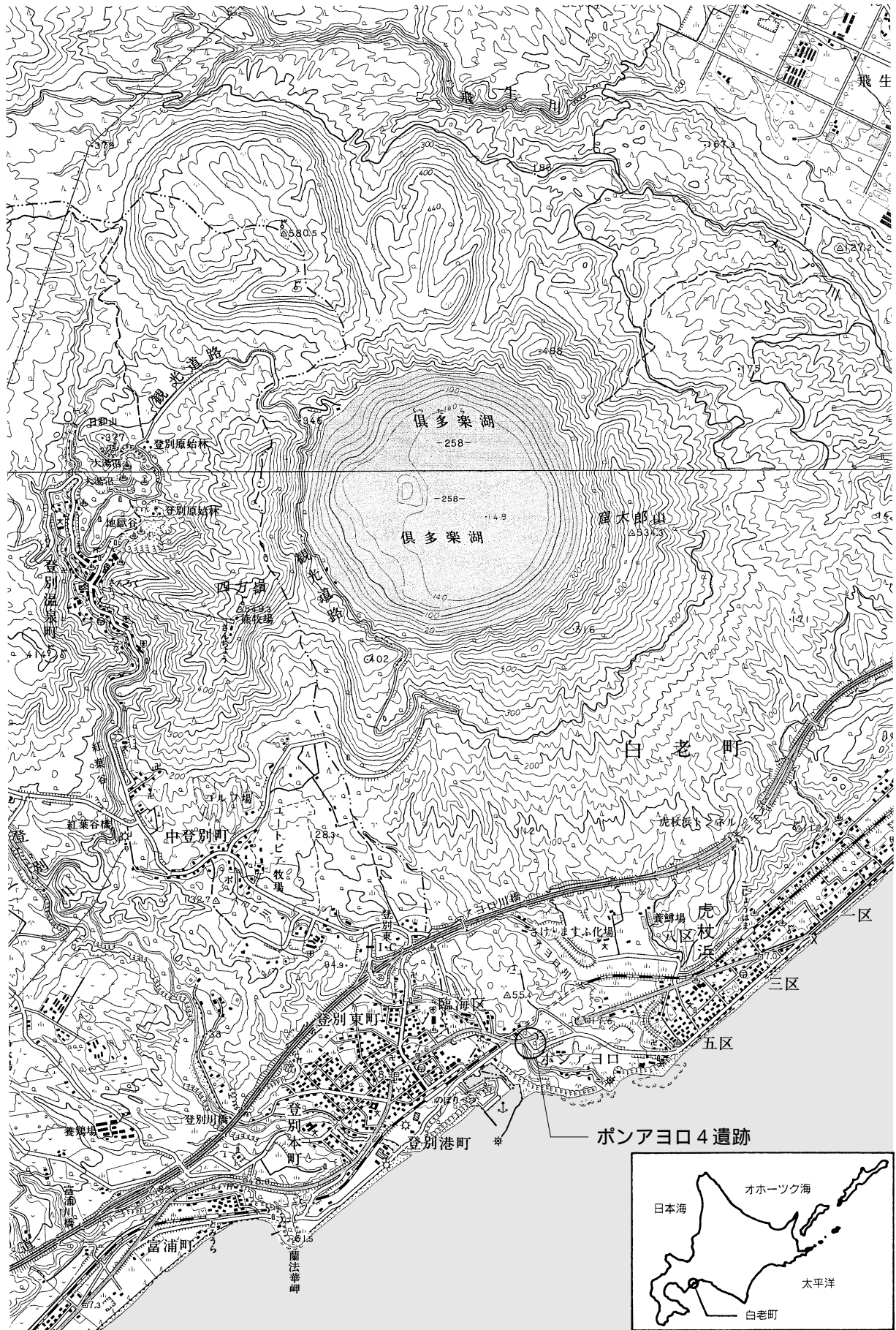
ポンアヨロ 4 遺跡で貝殻文・沈線文土器群に属すると見られる円孔文土器が出土しており、後半（中茶路式・東釧路Ⅳ式）の時期の土坑・焼土が検出された。虎杖浜 2 遺跡からは、物見台式の土器片が得られている（工藤 1999）。虎杖浜 1 遺跡では、竪穴住居跡 1 軒、平底の貝殻条痕文土器と篋状工具や指頭により整形された砲弾形の「虎杖浜式」土器等が報告されている（大場他 1962）。住居跡床面から採取された木炭（I-551）の放射性炭素年代は、7,700±200 年（B.P.）と測定されている（大場・チャード 1962）。虎杖浜 3 遺跡では後半の時期のものと考えられる住居跡や墓、土坑等が検出され、虎杖浜式、アルトリ式、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式等の土器が出土している（北埋文 1983 a）。虎杖浜 5 遺跡からは、アルトリ式土器を伴う石刃鎌や石刃、エンドスクレイパーが表採されている（佐藤・工藤 1980）。

縄文時代前期

虎杖浜 13 遺跡で前半の春日町式土器が出土している（工藤 1999）。虎杖浜 2 遺跡では、後半の円筒土器下層 a 式期の住居跡 27 軒、貝塚 2 ヲ所、盛土 4 ヲ所を始めとして、墓、土坑、焼土等多数の遺構を伴う大規模な集落が調査されている。また、東北地方南部との交流を示す大木 2 式・同 3 式土器も報告されている（岡田 1978、工藤 1999、北埋文 2001・2002）。虎杖浜 4 遺跡では、円筒土器下層 d 式期の住居跡 5 軒と土坑群が検出されている（北埋文 1981）。

縄文時代中期

ポンアヨロ 4 遺跡では、後半（北筒式期）の時期の竪穴住居跡 4 軒と土坑群が検出された。また、



図Ⅱ-1 遺跡の位置

この前後の時期の遺物も多い（工藤1999）。虎杖浜3遺跡、虎杖浜4遺跡では、前半の円筒土器上層式、後半の天神山式、柏木川式、北筒式等の土器が出土している（北埋文1981・1983a）。

縄文時代後期

虎杖浜3遺跡では、前葉（余市式期）の石囲い炉を伴う住居跡1軒や住居的施設2基、中葉の手稲式土器が副葬された墓が検出されている（北埋文1983a）。虎杖浜9遺跡は前葉（天裕寺式期）の貝塚で、崖面にエゾイガイ等の岩礁性貝類を主体とする貝層が確認されている（工藤1999）。虎杖浜4遺跡でも、余市式、入江式等の土器が得られている（北埋文1981）。

縄文時代晩期

虎杖浜7遺跡では、後葉の大洞A式に相当する大型の壺形土器が倒立した状態で出土している（工藤1999）。なお虎杖浜地区からはやや離れているが、社台1遺跡において、中葉の大洞C1・C2式に属する赤彩の精製土器や藍胎漆器等の副葬品を伴う墓が調査されている（北埋文1981）。

続縄文時代

アヨロ川右岸の河口付近にあるアヨロ遺跡が知られている。前葉の恵山式期を主体とする65基の墓や、3軒の竪穴住居跡が検出された。墓には恵山式土器や石器、玉類等の副葬品が納められていた（名取・峰山1962、高橋1980）。虎杖浜4遺跡では、中葉の後北式に相当する注口土器の破片が出土している（北埋文1981）。

擦文時代

現在までのところ、アヨロ遺跡で初頭の十勝最寄式土器が出土した例のみである（名取・峰山1962）。

アイヌ文化期

ポンアヨロ川河口の両岸でチャシが確認されている。右岸がカムイミントルチャシ、左岸がカムイエカシチャシである。後者は海を臨む丘頂式チャシで、1976年に発掘調査されている。丘頂を囲むように壕がめぐり、囲まれた区画内では焼土3ヵ所が検出された。遺物は鉄製の槍先や刀子などが出土している。構築年代は、寛文3（1663）年に降下した有珠b軽石が壕の内部に堆積していることから、これよりあまり遡らないのではと推測されている（岡田1977）。

3 アイヌ語地名

遺跡名の「ポンアヨロ」はアイヌ語に由来する。明治24年に刊行された永田方正著『北海道蝦夷語地名解』（初版）の「第二篇 胆振国幌別郡」には「ポンアヨロ」の記載はないが、「アヨロ」が「アイオロ」として説明されている（永田1984）。以下は原文のままである。

Aioro アイオロ 矢ヲ納メル 「アイオマレ」ト同意ナリト「ポロベツ」土人云フ
「アヨロ」ト云フハ急言ナリ

知里真志保・山田秀三の「幌別町のアイヌ語地名」は、詳細に虎杖浜近辺のアイヌ語地名を紹介している。まず、「アヨロ」については、“アヨロ川の川口に昔あった部落及びその川の名。アヨロコタン（アイ・オロ・オ・コタン [矢・そこ・に群生する・部落]）の下略形か。ここからは今も石鏃が出るという。”と解釈されている。

「ポンアヨロ」については、“ポンアヨロ川の川口にあった部落及びその川の名。既出のアヨロを親川と考え、それに対して「ポン・アヨロ」（「子である・アヨロ」「小さい・アヨロ」）と云ったのである。”と述べている（知里・山田1958）。

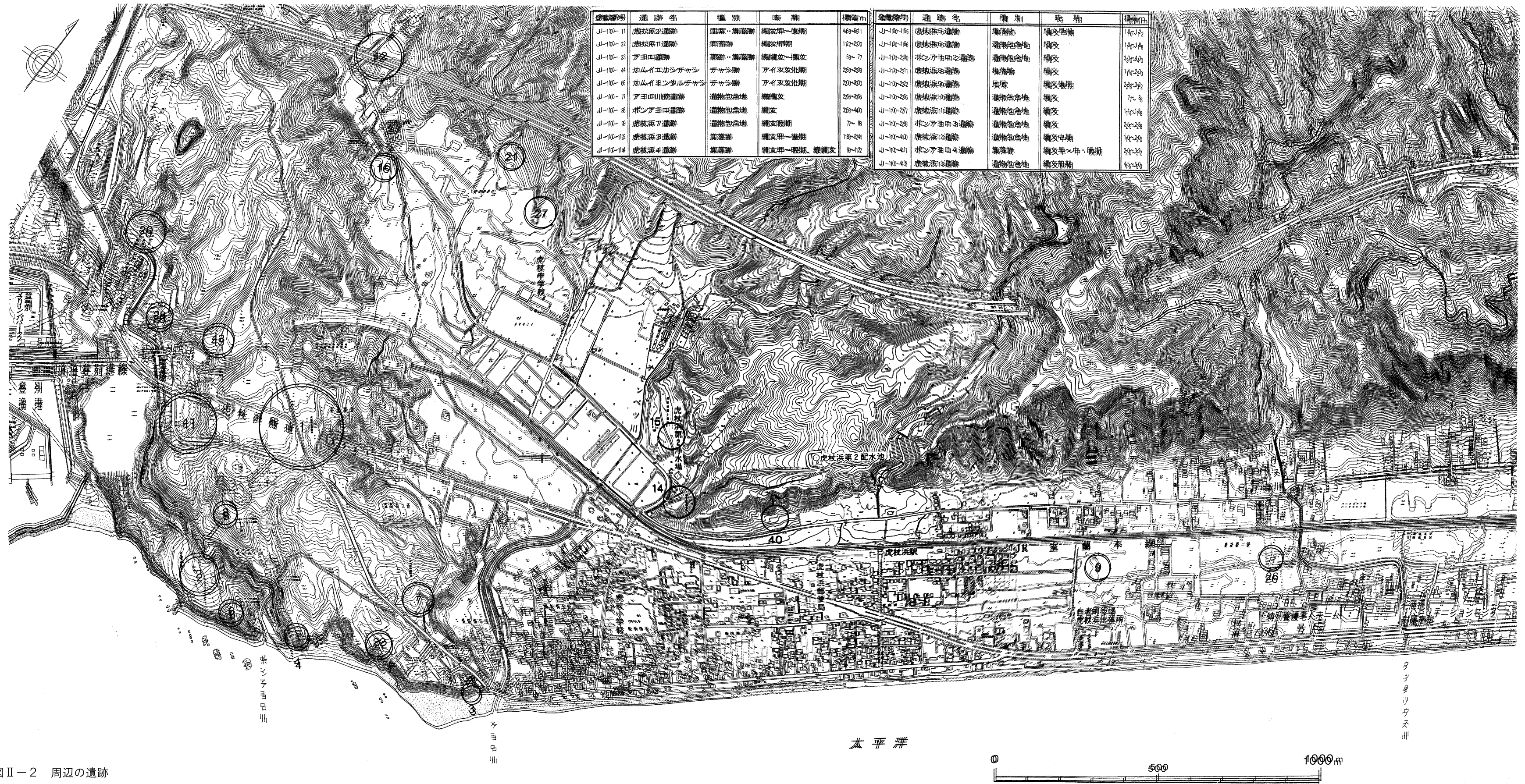
また、ポンアヨロの付近には、「オソルコツ」、「イマニチ」、「カムイエカシチャシ」、「カムイミントル」、「カムイワッカ」といった、伝承をもつアイヌ語地名が多く伝えられている。図II-3は「幌

表Ⅱ－１ 周辺の遺跡一覧

登録番号	遺跡名	種別	地目	立地	時期	調査歴	文献	備考
1	虎杖浜2遺跡	貝塚 集落跡	原野	アヨロ川とボンアヨロ川 に挟まれた台地の頂部	縄文早～後期	1961・1977 1997 1999～2001	大場他1962 岡田1978、工藤1999 北埋文2001・2002	継続調査予定
2	虎杖浜1遺跡	集落跡	原野	ボンアヨロ川下流右岸 海岸段丘	縄文早期	1961	大場他1962	
3	アヨロ遺跡	集落跡 墓跡	海浜地	アヨロ川河口右岸 海岸段丘	続縄文・擦文	1953・1978 1979	名取・峰山1962 高橋1980	町指定有形 文化財(1986)
4	カムイエカシ チャシ	チャシ 跡	原野	ボンアヨロ川河口左岸 海岸段丘	アイヌ文化期	1976	岡田1977	
6	カムイミントル チャシ	チャシ 跡	原野	ボンアヨロ川下流右岸 海岸段丘	アイヌ文化期			
7	アヨロ川傍遺跡	遺物 包蔵地	山林	アヨロ川右岸台地	続縄文			旧ボンアヨロ A～C遺跡
8	ボンアヨロ遺跡	遺物 包蔵地	畑	ボンアヨロ川左岸台地	縄文前期			旧ボンアヨロ D遺跡
9	虎杖浜7遺跡	遺物 包蔵地	原野	海岸砂丘	縄文晩期		工藤1999	養鶏場跡地 殆ど破壊
12	虎杖浜3遺跡	集落跡	原野	アヨロ川左岸台地ほか	縄文早～後期	1980・1982	北埋文1983a	
14	虎杖浜4遺跡	集落跡	畑	オモンベツ川左岸	縄文前～晩期	1980	北埋文1981	
15	虎杖浜5遺跡	遺物 包蔵地	原野	オモンベツ川左岸 河岸段丘	縄文早～後期 続縄文		佐藤・工藤1980	
16	虎杖浜6遺跡	遺物 包蔵地	山林	アヨロ川中流右岸 河岸段丘	縄文中・後期			
20	ボンアヨロ2遺跡	遺物 包蔵地	山林	ボンアヨロ川中流右岸	縄文前・中期			
21	虎杖浜8遺跡	遺物 包蔵地	山林	アヨロ川中流右岸 河岸段丘	縄文前期			
22	虎杖浜9遺跡	貝塚	原野	海岸砂丘	縄文後期	(1997)*1	工藤1999	
26	虎杖浜10遺跡	遺物 包蔵地	原野	海岸砂丘	縄文晩期			
27	虎杖浜11遺跡	遺物 包蔵地	山林	アヨロ川中流右岸 舌状台地	縄文前・中期			土砂採取で大 半を失う
28	ボンアヨロ3遺跡	遺物 包蔵地	山林	ボンアヨロ川中流右岸 河岸段丘	縄文前・中期			
40	虎杖浜12遺跡	遺物 包蔵地	山林	アヨロ川左岸、古砂丘	縄文中期			
41	ボンアヨロ4遺跡	集落跡	山林	ボンアヨロ川下流左岸 河岸段丘	縄文早～後期	1998・2003	工藤1999、本報告	継続調査予定
43	虎杖浜13遺跡	遺物 包蔵地	山林	ボンアヨロ川中流右岸 舌状台地	縄文前期	(1999)*2	工藤1999	

北海道教育委員会の『埋蔵文化財包蔵地カード』から作成

*1 二階堂啓也・乾哲也(両者とも当時白老町教育委員会)による踏査 *2 北海道教育委員会による範囲確認調査



遺跡番号	遺跡名	種別	時期	標高(m)	遺跡番号	遺跡名	種別	時期	標高(m)
J-10-11	虎杖浜2遺跡	埋蔵物・集落跡	縄文早～後期	46-51	J-10-15	虎杖浜5遺跡	集落跡	縄文早期	46-52
J-10-12	虎杖浜11遺跡	集落跡	縄文早期	12-20	J-10-16	虎杖浜6遺跡	遺物包含地	縄文	46-56
J-10-13	アヲ田遺跡	墓跡・集落跡	縄縄文～縄文	8-7	J-10-20	ホノア田2遺跡	遺物包含地	縄文	36-40
J-10-14	カムイエカシヤシ	ヤシ跡	アイヌ文化期	28-29	J-10-21	虎杖浜8遺跡	集落跡	縄文	46-26
J-10-15	カムイミンタルヤシ	ヤシ跡	アイヌ文化期	20-30	J-10-22	虎杖浜9遺跡	奥座	縄文後期	36-32
J-10-17	アヲ田川橋遺跡	遺物包含地	縄縄文	28-26	J-10-26	虎杖浜6遺跡	遺物包含地	縄文	7-8
J-10-18	ホノア田遺跡	遺物包含地	縄文	38-40	J-10-27	虎杖浜10遺跡	遺物包含地	縄文	46-6
J-10-19	虎杖浜7遺跡	遺物包含地	縄文前期	7-8	J-10-28	ホノア田3遺跡	遺物包含地	縄文	25-26
J-10-102	虎杖浜3遺跡	集落跡	縄文早～後期	18-24	J-10-40	虎杖浜12遺跡	遺物包含地	縄文中期	46-20
J-10-114	虎杖浜4遺跡	集落跡	縄文早～後期、縄縄文	9-12	J-10-41	ホノア田4遺跡	集落跡	縄文早～中、晩期	20-30
					J-10-42	虎杖浜13遺跡	遺物包含地	縄文前期	46-50

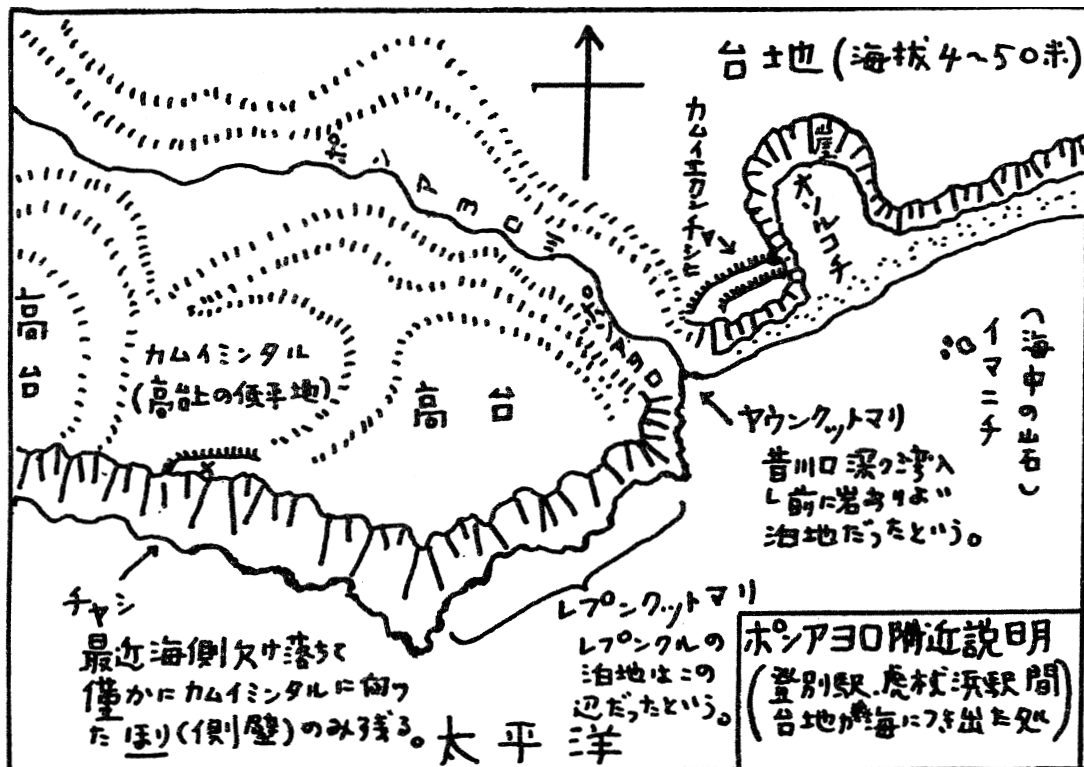
図II-2 周辺の遺跡

別町のアイヌ語地名」中の「ボンアヨロ附近説明」図である（知里・山田1958）。この図にはアイヌ語地名の立地と位置関係が記載されている。ボンアヨロ4遺跡はこの図の範囲外になるが、左上方（北西側）に位置する。現在のボンアヨロ付近と比べると、この半世紀ほどの間に幾分変化が見られる。幾つかの例を挙げると、「カムイエカシチャシ（「神祖の砦」の意）」にはアヨロ鼻灯台が建設されている。前節で触れたように、工事に先立ちチャシの一部について発掘調査が行われた（岡田1977）。また、海岸部の砂浜は年々侵食がすすんでいる。これが原因となり、1978・79年、記録保存を目的としてアヨロ遺跡が調査された（高橋1980）。現在も潮位によってはボンアヨロ川の河口から「オソルコツ（「尻餅の跡」の意）」付近へ歩いて渡るのが困難になってきている。「オソルコツ」の沖合いにある「イマニチ（「魚焼串」の意）」のうち、幾つかの岩は海中に没して姿の見えないことが多い。一方でボンアヨロ川河口の「ヤウソクツマリ（「土地の人の碇泊所」の意）」には、内湾の入り口に堆積した砂によって直線的な海岸線となっており、かつてトマリ（碇泊地）であったという面影はない。

4 近世以降の虎杖浜

江戸時代前期の享保年間（1716～1736）まで、ボンアヨロとアヨロには多数のアイヌが居住していたが、仲間同士の争いにより四散してしまったとの伝承が残されている（白老町1992）。カムイエカシチャシの伝説からも、ボンアヨロ川の河口に大きなコタンの存在していたことが推測される。寛保元（1741）年、渡島大島が噴火、大津波が太平洋沿岸を襲い、白老・登別の海岸部に住んでいたアイヌが多数犠牲になったという。白老町在住の郷土史研究家高田寅雄は、ボンアヨロコタンの断絶はこの時以降ではないかと推理している（高田1985）。当時、この地方には松前藩が直轄するアヨロ場所が置かれており、西はフシコベツ川から東はメツ川までの範囲で、アイヌをコンブ漁などに従事させていた。アヨロ場所は寛政12（1800）年頃、白老場所に吸収された（白老町1992）。

『東西蝦夷山川地理取調紀行』は松浦武四郎が安政3～5（1856～1858）年に蝦夷地を巡回した際



図II-3 「ボンアヨロ附近説明」図

(知里真志保・山田秀三「幌別町のアイヌ語地名」(1958)8頁より転載)

の見聞である。この中の「東蝦夷日誌」に、以下のような虎杖浜付近の地理的環境が、詳しく記録されている。記述の順序は前後しているが、幌別から勇払へ向う行程である（吉田編1962）。

「白老領 アエウロ 境より（六丁廿間）アエウロ（小川、海岸出岬）名義はアイヲロにて、アイとは矢の事、ヲロは納め、または入るの意也。矢を納むと譯す。土人往来の時、爰にて矢を放ち神に捧げる義也（昆布場）。ヲシヨロコツ（砂地）同名處々に多し。（十餘丁）往来は海岸より少く上小坂有。是を越てヲモンベツの晝所へ下るなり。エマニシ岬、箸所といふ義。廻りてヲモンベ（小川）、陸地と爰にて逢ふ（晝休所、漁や、夷人小や）。名義、時化の時に川口が閉まると云義也。

川筋にヒシクシナイ（右小川）過て二股、右ホロナイ（源ヌブルベツ岳）、左りホンヲモンベツ、其源クツタルシ岳。虎杖多きとの義也。巔に沼有（周五六丁）。是に水留まりて何所へ落るか知らざれども、按に神水に出る也と思ふ。（後略）」

ここにはアヨロ川河口付近の海岸から川筋、クッタラ湖までの地勢、地名の由来が記録されており、後の地名解の基本文献となっていることがわかる。

明治以降はこの地区への和人の入植も次第に増加し、漁村へと発展していった。ところで、この地域は昭和初期までアイヌ語の地名をそのままカタカナ表記で用いていた。最初に漢字の「虎杖」が登場するのは、大正3（1914）年、クッタリウスの簡易教育所が小学校に昇格する際に「虎杖小学校」と命名されたときである。クッタリウス（クツタルシ）はkuttar-us-i「オオイタドリ（或いはウラジロイタドリ）・群生している所」の意味であることから、イタドリの漢名である「虎杖」を用いたという（知里・山田1958）。その後、昭和3（1927）年、この地区に新しい駅が開設され、駅名を「虎杖浜」とした。昭和14（1938）年、「白老村ノ大字廃止字名改称並ニ地番変更」により、クッタリウス、アヨロ、ポンアヨロの3地区にある14の字名を統合して、正式に「字虎杖浜」となった。

（芝田直人）

Ⅲ 調査の方法

1 グリッドの設定

基本図は「一般国道36号白老町登別道路用地測量現況平面図（室蘭開発建設部）縮尺1000分の1」であるが、基本的には、調査予定範囲全域を網羅する平成10年度の白老町教育委員会による調査での設定方法を踏襲している（工藤1999）。

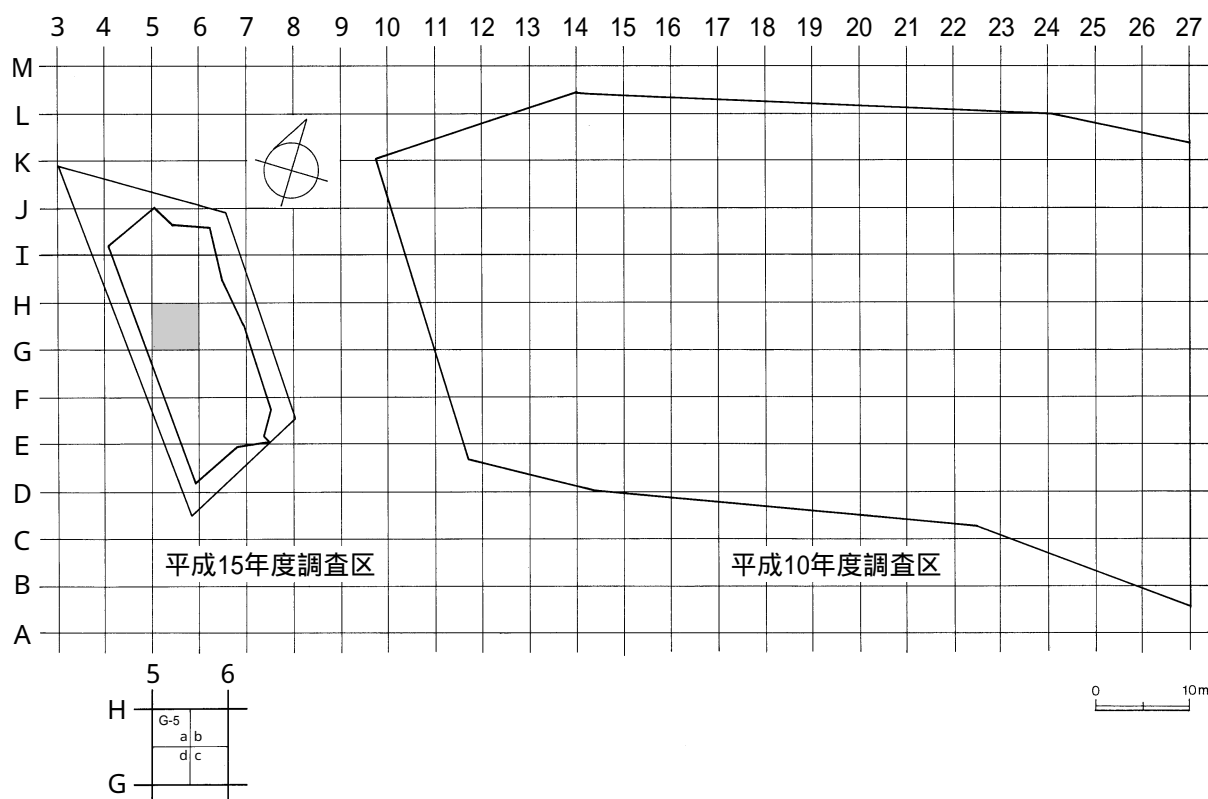
グリッドは遺跡の調査予定範囲南西端に設定された任意の点を基点とする5m×5mの方眼からなる。表示はアルファベットとアラビア数字の組み合わせである。基点を通り直交するAラインと0ラインが基線で、そこからAラインに平行に北西へ向かい5mごとにB、C、D…、同様に0ラインに平行に北東へ向かい1、2、3…とした。調査区内ではこれらの直線が交差する地点に杭を打設した。今年度の調査範囲はD～Jライン、4～8ライン間に収まる。

グリッドはこの5m方眼を基本とし、その南西端（図左下）の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される（例G-5）。また、今年度の調査では、前回同様5m方眼のグリッドを2.5mの方眼に4分割し、遺物の取り上げを行なっている。小グリッドは北西側から時計回りにa、b、c、dを付し、「G-5-a」のように呼称した（図Ⅲ-1）。なお、数字ラインは真北に対し、N-18°26'38" 90-Wである。

基準杭（G-6）の平面直角座標は第XⅡ系で以下のとおりである。改正前の日本測地系による座標も併記しておく。

世界測地系（測地成果2000）	X = -170973.290	Y = -87129.244
日本測地系（改正前）	X = -171236.604	Y = -86822.638
世界測地系（測地成果2000）	緯度 = 42° 27' 21.5958"	経度 = 141° 11' 26.3857"

（遠藤香澄）



図Ⅲ-1 グリッド設定図

2 土層の区分

今年度の調査区は、台地から氾濫原へと地形が移り変わる部分にあたる。台地部分の層位については、平成11年度刊行の『白老町 虎杖浜2・ボンアヨロ4遺跡』（工藤1999）の区分に倣い、相当する層にⅠ～Ⅵのローマ数字を付した。氾濫原部分については、Ⅰ～Ⅵに相当する層が見られなかったため、新たに確認された各層の特徴から大きく3つの層（上位からⅠ・Ⅱ・Ⅲ）に分けた。

土層の記載にあたっては、『白老町 虎杖浜2遺跡（2）』（北埋文2002）での観察項目を参考にし、『新版標準土色帖』（小山・竹原1996）の「土色」、および『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会1984）の「土性」・「粘着性」・「堅密度」、一部の礫については「石礫の形状」を用いて表している。以下に各層の概要を「台地」と「氾濫原」に分けて述べる。

「台地」

Ⅰ層：表土（壁面崩壊防止用の土嚢袋のため、観察できなかった）。

Ⅱ層：黒褐色（5YR 3/1）の砂壤土。粘着性「弱」、堅密度「軟」。層厚約10cm。

Ⅲ層：有珠bテフラ（Us-b）。1663（寛文3）年降下。上中下に大別される。上位は灰黄褐色（10YR 4.5/2）のシルト質壤土。粘着性「弱」、堅密度「軟」。層厚約3cm。中位は明黄褐色（10YR 7/6）を呈する軽石（上位は径約3cm、下位は約5mm）が主体。オリーブ灰色を呈する1cm前後の岩片等が混じる。層厚約15cm。下位は黄褐色（2.5Y 5/3）のシルト質壤土。粘着性「中」、堅密度「軟」。層厚約2cm。

Ⅳ層：黒色（10YR 2/1）の埴壤土。縄文時代の遺物包含層。粘着性「中」、堅密度は上部が「軟」、下部が「堅」。下部には礫（軽石も含む）が多く混じる（径10cm以下が主体）。層厚は約50cmであるが、Gライン付近では厚く約80cmとなる。本層の上位では白頭山-苦小牧テフラ（B-Tm）、中位では駒ヶ岳gテフラ（Ko-g）がともに部分的に認められる。Ko-gの堆積する部分では、それを境に上位をⅣa層、下位をⅣb層と呼称している。

* 白頭山-苦小牧テフラ（B-Tm）：灰黄褐色（10YR 5/2）の火山灰。層厚約2cm。10世紀降灰とされる。Ⅳ層上位にパッチ状に堆積する。

* 駒ヶ岳gテフラ（Ko-g）：明黄褐色（10YR 7/6）の火山灰。層厚約20cm。台地の縁に部分的に堆積する。降灰は約6,000年前とされる。胆振地方では「幌別黄橙色火山灰」と呼ばれることもあり、噴出源が未確定のテフラであったが、検鏡作業の結果、駒ヶ岳gテフラに対比されている（北埋文2002）。

Ⅴ層：漸移層。埴壤土。粘着性「中」、堅密度「堅」。E～Gラインにかけては、垂角礫・垂円礫が多く混じる（径10cm以下が主体）。

Ⅵ層：明黄褐色（10YR 6/6）の壤土。粘着性「中」、堅密度は「すこぶる堅」。垂角礫・垂円礫が混じる（径5cm以下が主体）。調査区南端～Iラインにかけての概ね標高19m以上（調査終了面）の台地部分に堆積している。層厚20cm以上。

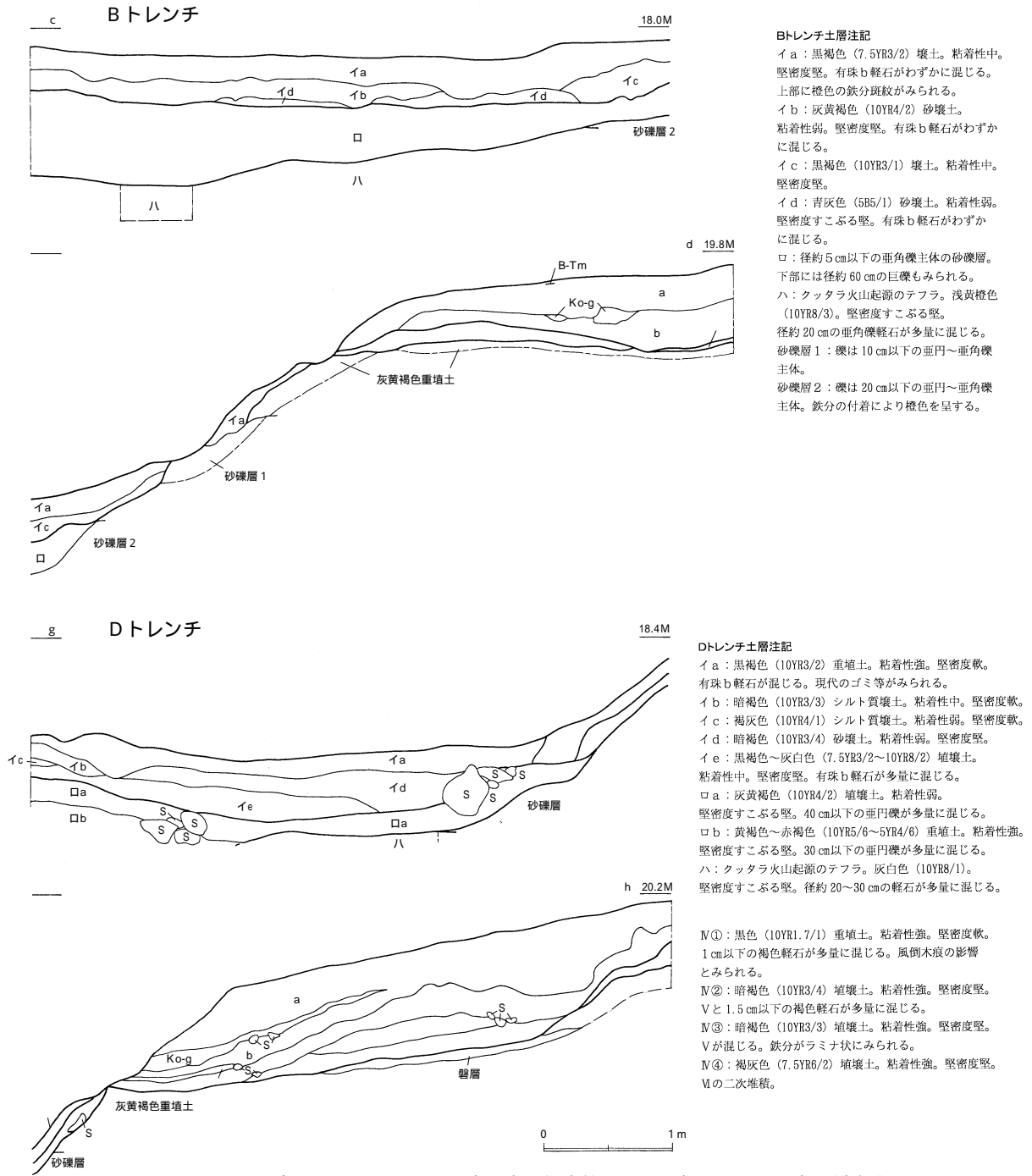
標高約19m以下の台地部分では、酸化鉄の盤層をはさみ、Ⅵ層とは色調や土性の異なる層が認められたので、以下に記載しておく。

* 灰黄褐色（10YR 6/2）の重埴土。粘着性「中」、堅密度「堅」。径20cm以下の垂角礫が多く混じる。標高約19m以下の台地部分調査終了面。

「氾濫原」

Ⅰ層：現代の廃棄物や垂円礫の有珠b軽石が見られ、ボンアヨロ川の氾濫原であった時期（有珠b降下後～盛土に覆われるまで）の堆積物と考えられる。台地部分のⅠ・Ⅱ層に相当する。

Ⅱ層：砂礫層で、径約5～40cmの垂角礫・垂円礫が主体（最大で径約60cm）。上部には垂円礫の有珠



イ・ロ・ハ層内でのアルファベット小文字は便宜的なもので各トレンチ同士で対応するものではない

図III-2 土層断面図 (氾濫原～台地)

b軽石が混じる。ポンアヨロ川の河道であった時期 (ハ層の堆積後～有珠b降下後まで) のものと見られ、台地部分ではII層以下に相当する。

ハ層：クッタラ火山起源のテフラ (軽石流堆積物)。浅黄橙色 (10YR 8 / 3) の火山灰に、径約20cmの灰白色 (10YR 8 / 1) 軽石が多量に混じる。山縣 (1994) のクッタラ第1テフラ (Kt-1) に相当か。基底は確認していない。Kt-1の噴出は約4.2万年前とされる (許他2001)。 (山中文雄)

3 発掘調査の方法

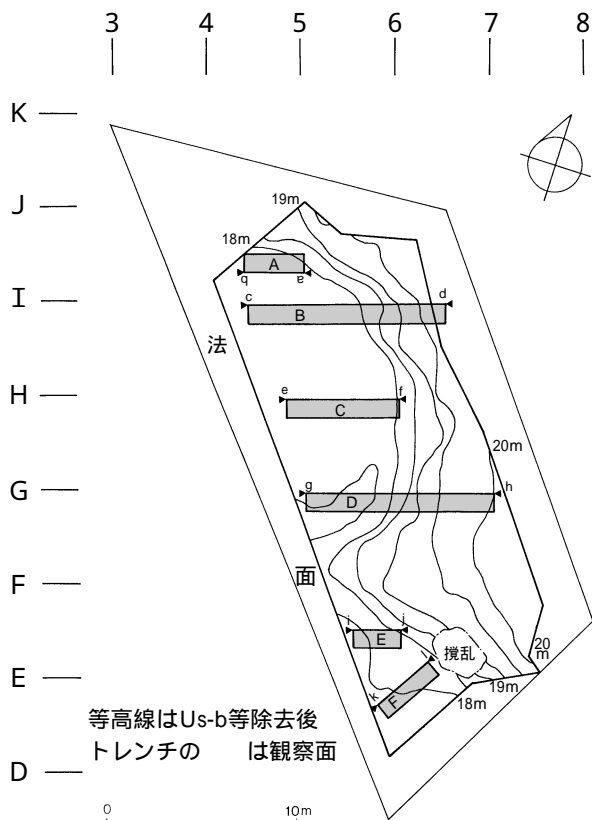
調査の対象は、有珠bテフラ（Ⅲ層）より下位の黒色土（Ⅳ層）と漸移層（Ⅴ層）であることから、現地表からⅢ層まで重機（バックホー）を用いて除去した。その際、約4mの深さでⅣ層等が現れる部分もあったため、調査区の壁面を法切りし、出来上がった傾斜に沿って土嚢袋を積み重ね、壁面崩壊の予防措置をとった。

グリッドの設定については、本章1で触れたとおりである。調査ではまず、遺跡の様相を早急に把握するためトレンチ（発掘溝）を入れた（図Ⅲ-1のB・Fトレンチ）。その結果、台地より一段低い部分では、両トレンチとも遺物包含層であるⅣ層は認められず、砂礫等が堆積していた。この部分について、さらに4カ所のトレンチを入れたところ（図Ⅲ-1のA・C・D・Eトレンチ）、いずれのトレンチでも先に観察された状況とほぼ同じで、砂礫等が堆積しⅣ層は認められなかったことなどから、ポンアヨロ川の旧河道、氾濫原部分と判断された。遺物包含層が確認されなかったため、この部分については各トレンチの記録を取った上で調査を終了し、後の調査の都合により排土置場とした。斜面、台地部分についてはグリッドごとの調査を行っている。

遺物包含層の調査は基本的に移植ゴテを用いて掘り下げを行い、遺物が集中する部分は竹べらなどを併用した。出土した遺物は、遺跡名、グリッド名（小グリッド名まで）、層位名、日付を記入したポリ袋で取り上げた。

記録類は、地形測量図（有珠bテフラ等を除去した面、および調査終了面）、土層断面図、遺物出土状況図等を作成し、写真撮影はリバーサル35mm判・6×7判、モノクローム6×7判、ネガカラー35mm判のフィルムを用いて行った。

なお調査終了後は、準備段階で除去した土によって調査範囲の埋め戻しを行い、芝を貼り調査前の状態に戻してある。



図Ⅲ-3 トレンチ位置図

4 遺物整理の方法

調査で取り上げられた遺物等は、主に雨天の日には水洗を行った。乾燥後、土器は時期分類、石器等は形態等による分類を行い、それぞれ遺物カードを作成してから遺物台帳に登録・集計した。土器、石器等への注記は現地で行っている。注記内容は以下のとおりである。

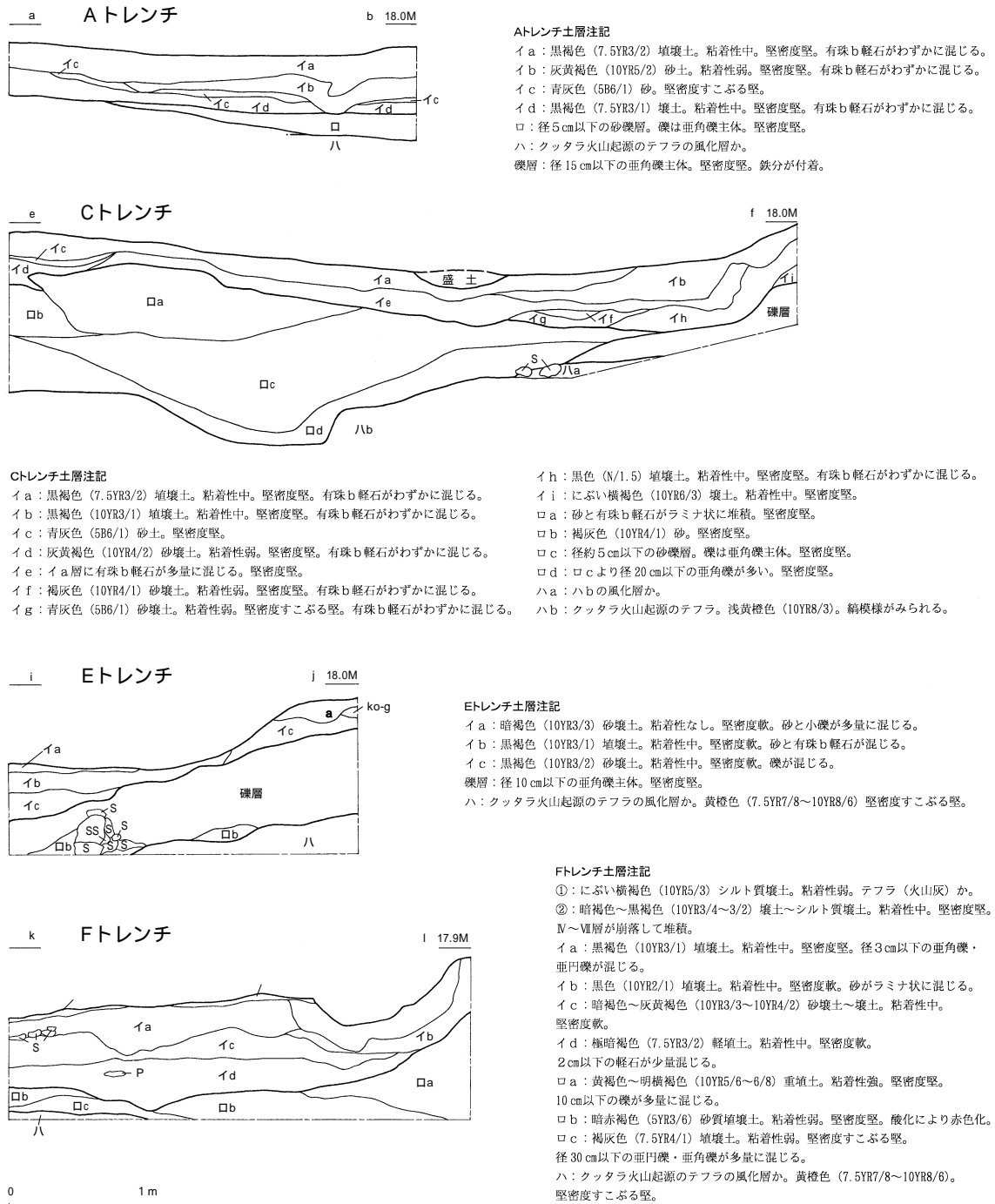
(例) ポン4 E-6-c-3 IVb

遺跡名略称 グリッド名-遺物番号 層名

11月から行われた当センターでの整理作業は、土器片の接合、石器等の実測を行い、土器片で代表的なものについては拓影図を作成するなどした。掲載する遺物の写真撮影は、リバーサル6×7判、モノクローム6×7判のフィルムを用いて行った。

5 遺物・記録類の保管

整理終了後の遺物は「遺物収納台帳」に登録し、



イ・ロ・ハ層内でのアルファベット小文字は便宜的なもので各トレンチ同士で対応するものではない

図 III-4 土層断面図 (汜濫原)

報告書に「掲載」したもの、しなかったものを区分してコンテナに収めた。出土遺物は、「遺物台帳」、「遺物収納台帳」とともに白老町教育委員会に保管される。

発掘調査および室内整理事業で作成された記録類は、当センターで保管される。(山中文雄)

6 遺物の分類

土 器

土器は、石狩低地帯、太平洋沿岸～噴火湾での調査結果を基にし、当センターが従来用いてきた時期分類基準に準拠して分類した。縄文時代早期の資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をⅡ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。続縄文時代に属するものはⅥ群、擦文時代に属するものはⅦ群に分類される。今年度の調査範囲からは、Ⅰ～Ⅳ群が出土しており、Ⅴ～Ⅶ群は出土していない。

ボンアヨロ4遺跡は平成10年度に白老町教育委員会により調査されているが、土器の分類基準がやや異なるようである。本来同一の遺跡であることから対照表を掲載した（表Ⅲ－1）。

石 器 等

石器類の分類基準は、石材と製作技術から剥片石器群、磨製石器群、礫石器群を大分類として用いた。今年度出土した石器類が非常に少なかったことから、ここでは器種による細分類は省略する。具体的にはスクレイパー、フレイク、たたき石、すり石、石皿、板状礫、礫・礫片等が出土している。

（芝田直人）

表Ⅲ－1 年度別土器分類対照表

時期区分		代表的な型式名	平成15年度	平成10年度	
縄文時代	早期	前半	物見台式、虎杖浜式など貝殻文系土器群	Ⅰ群a類	第1群1類
		後半	東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式	Ⅰ群b-1類	第1群2類1種
	コッタロ式		Ⅰ群b-2類		
	中茶路式		Ⅰ群b-3類	第1群2類2種	
	東釧路Ⅳ式		Ⅰ群b-4類	第1群3類	
	前期	前半	綱文式、春日町式、静内中野式など	Ⅱ群a類	第2群2類
		後半	円筒土器下層式、前期大木式、植苗式など	Ⅱ群b類	第2群1類
	中期	前半	円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式、萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式など	Ⅲ群a類	第3群1類
		後半	天神山式、萩ヶ岡3式など	Ⅲ群b-1類	第3群2類
			柏木川式、萩ヶ岡4式など	Ⅲ群b-2類	
			北筒式、煉瓦台式、静狩式など	Ⅲ群b-3類	第3群3類
	後期	前葉	余市式、手稲砂山式、入江式、白坂3式など	Ⅳ群a類	第3群4類 * 1
		中葉	ウサクマイC式、手稲式、 ^{ほっけま} 鯨潤式など	Ⅳ群b類	第4群
		後葉	堂林式、三ツ谷式、御殿山式など	Ⅳ群c類	
晩期	前葉	大洞B式、大洞BC式、上ノ国式など	Ⅴ群a類	第5群	
	中葉	大洞C1式、大洞C2式など	Ⅴ群b類		
	後葉	大洞A式、大洞A'式、タンネトウL式など	Ⅴ群c類		
続縄文時代		恵山式、後北式、北大式など	Ⅵ群		
擦文時代		擦文土器	Ⅶ群		

* 1 白老町教育委員会では余市式、入江Ⅲ類などのいわゆる余市式土器群を中期末に位置付けている。また、今年度分類のⅣ群a類のうち、入江式、大津式などは第4群土器（後期）に分類されると考えられるが、ボンアヨロ4遺跡では出土していない。

IV 包含層出土の遺物

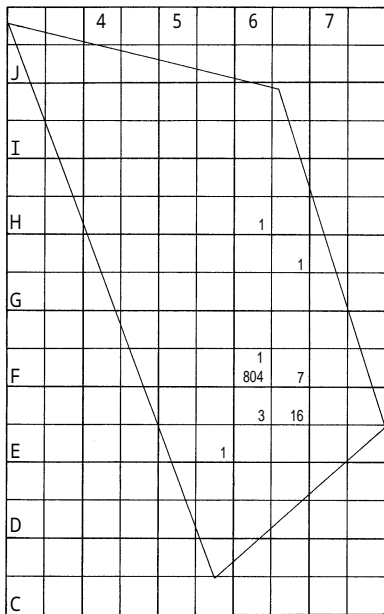
1 概要

包含層等から1,190点の遺物が出土した。IV層の中位において部分的に認められる駒ヶ岳gテフラ(Ko-g)を鍵層として、それより下位のIVb層、IV層下位から縄文時代早期の遺物が、上位のIVa層、IV層中～上位にかけては同前期から後期までの遺物が出土する。

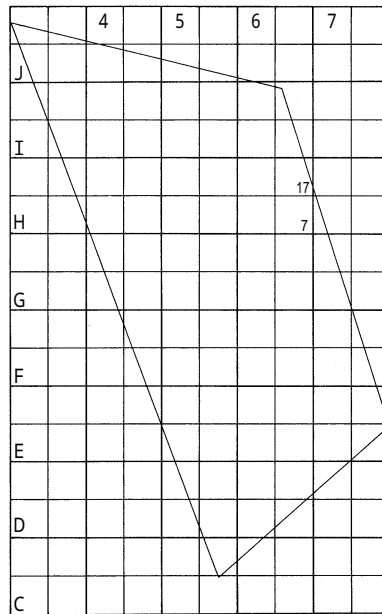
2 土器

1,021点が出土した。I群b-3類が835点と最も多い。細かく破砕しているが、接合関係や底部片等から3～4個体と推測される。III群b類が140点で次ぐが、大部分が磨滅した微細な破片である。

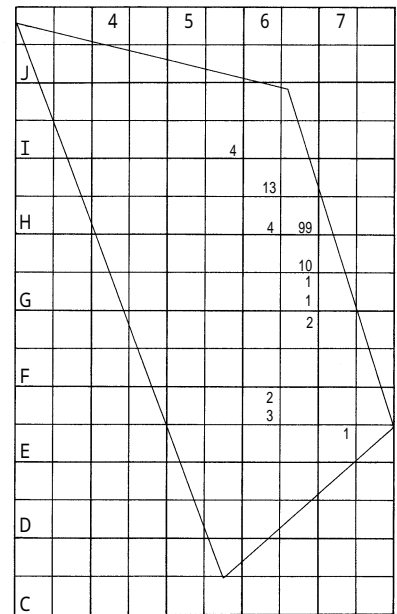
I群b類土器 (上: Ib-1, 下: Ib-3)



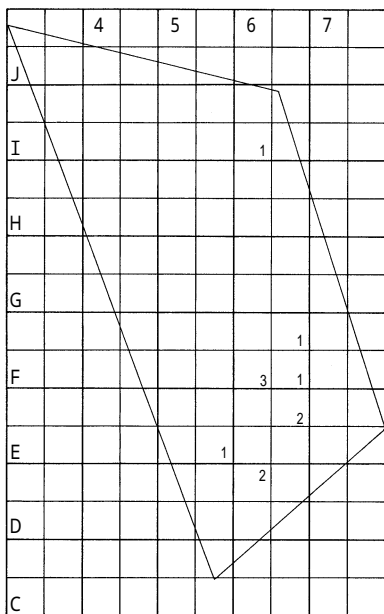
III群a類土器



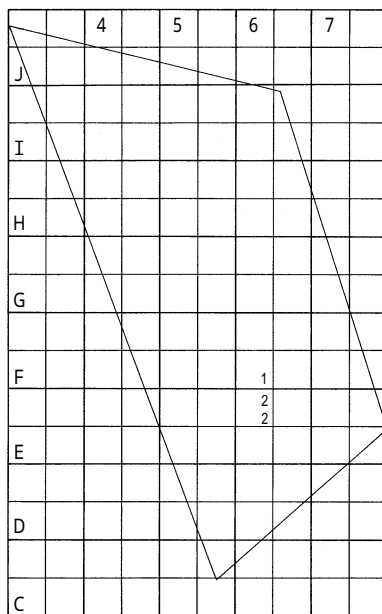
III群b類土器 (上: IIIb-3, 下: 細分不明)



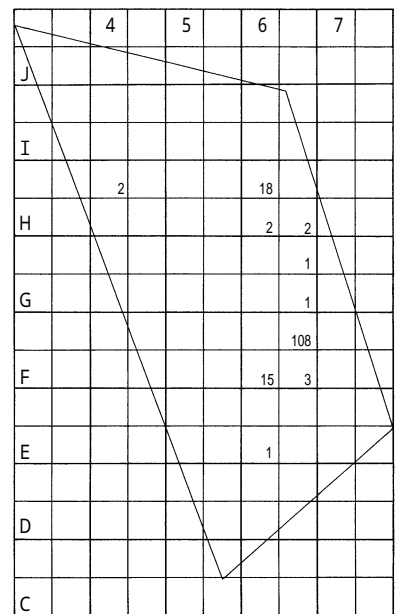
剥片石器類 (上: スクレイパー, 下: フレイク)



礫石器類 (上: たたき石・すり石, 下: 石皿)



礫・礫片 (板状礫を含む)



図IV-1 包含層出土遺物の分布



図IV-2 包含層出土の土器

1はI群a類。物見台式に相当する。口縁部の破片で外面が剥落している。口縁部がやや外反し、胴部が膨らむ器形と推測される。底部を欠失する。口縁は緩い波状で、口唇断面は角形を呈する。口唇の内外面には貝殻腹縁が短く刻まれる。横位あるいは斜位に貝殻条痕文を施した後、沈線で弧状の文様帯を区画している。その間に貝殻腹縁による押引文を施し、最後に沈線上に円形刺突文をほぼ等間隔に巡らしている。胎土は細砂礫を多く含む。

2はI群b-1類。東釧路Ⅱ式と見なされるもの。胴部片である。左右撚りの異なる原体を3本束ねて回転させた縄文で、施文が重複している。内面には横位の条痕が見られる。器壁は堅くしまっており、胎土は砂礫を多く含む。

3～7はI群b-3類。中茶路式に相当する。3は口縁部が内傾ぎみに立ち上がり、胴部が膨らむ深鉢形である。口唇断面は尖り、内面へ傾斜する。器面全体に細貼付帯をほぼ平行に巡らせ、その上から短縄文を縦位に施している。胴部の上位では方向の異なる斜位の細貼付帯が連結される(3a)。また下位では縦位の細貼付帯を並列させて格子状にしている(3a・b)。4は口唇断面がやや丸みを帯びており(4a)、胴部には横位の細貼付帯が直線状または波状に巡り、一部は横環せずに下位のものに接続する(4b～d)。細貼付帯の間に短縄文が施されるが、その際に細貼付帯が押し潰され、薄く扁平になっている。5は細貼付帯の間に無文の部分が見られる。6、7は底部。どちらも断面がやや張り出す。7には0段多条の非常に細かい原体による斜行縄文が施される。I群b-3類は全体に焼成が弱いようで、内外面の剥落するものが多い。胎土は砂礫を多く含む。

8はⅡ群a類。静内中野式に相当する。胴部片で、内外面に同一原体によると考えられるLR斜行縄文が施されている。胎土に繊維が混入する。

9はⅢ群a類。サイベ沢Ⅶ式または見晴町式に相当する。口縁部で、緩やかな波状を呈する。口唇に縄端の連続圧痕による刻み目が見られる。器面にはRL斜行縄文が施される。器壁は堅くしまっており、胎土は黄白色火山灰・細砂を多く含む。

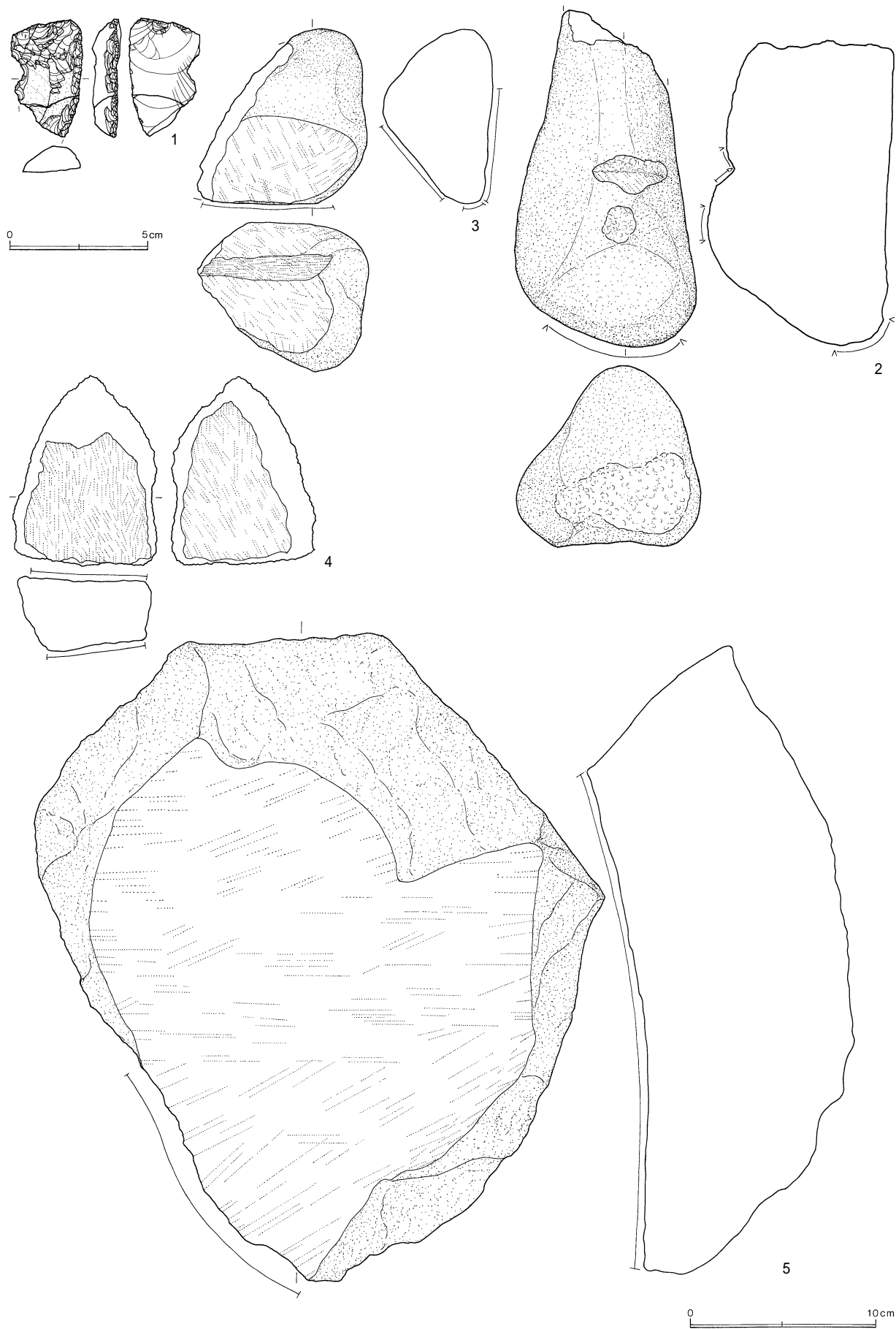
10～13はⅢ群b-3類。北筒式(トコロ6類)に相当する。10・11は断面三角形の肥厚帯を有し、口唇と口縁上部に篋状工具による押引文が施される。11は肥厚帯の直下に円形刺突文が見られる。12・13は胴部片。12は斜行縄文の地文に綾絡文が施される。胎土は黄白色火山灰・砂礫を多く含む。

14・15はⅣ群a類。余市式に相当すると推測される。胴部片のみ出土したが、平成10年度出土の復元個体や口縁部片を観察し、特徴が類似するものをこれに分類した。いずれもLR斜行縄文が施され、内面は丹念なミガキにより調整されている。胎土は緻密で黄白色火山灰・細砂を含む。

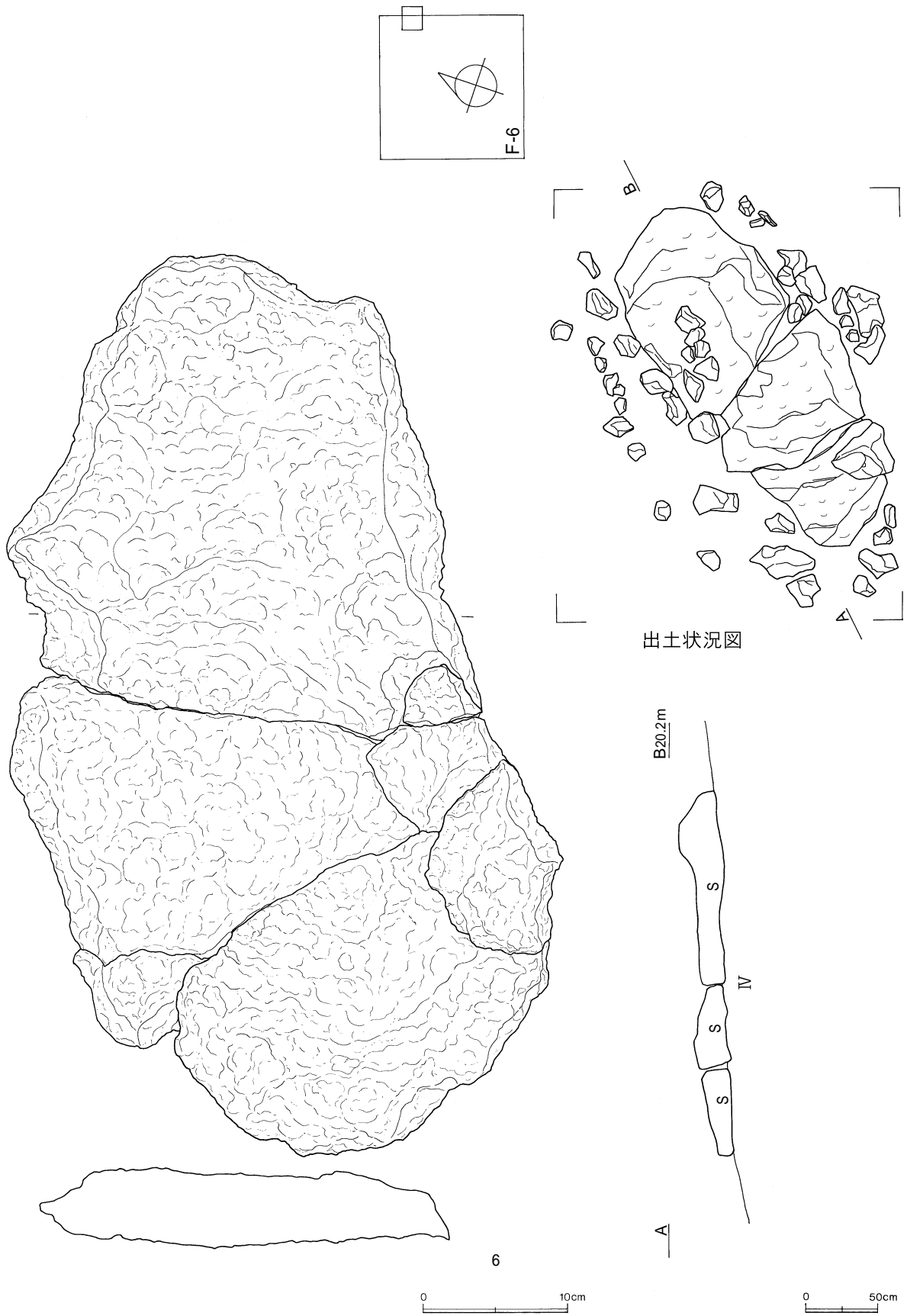
3 石器等

168点が出土した。このうち板状礫とその破片が108点、それ以外の礫・礫片が45点であり、定形的とされる石器類は非常に少ない。磨製石器は出土していない。

1はスクレイパー。破片2点が接合したもので、下半部を欠失する。縦長の剥片を素材とし、右側縁に外湾する刃部を設けている。表面に礫面、裏面に打瘤を残す。左側縁に抉入が見られることから、つまみ付きナイフ未成品の可能性がある。2はたたき石。上部を欠失する。断面三角形の礫を素材とし、下端部と頂部を敲いている。上弦には打ち欠きにより断面V字の抉りが入れている。3はすり石片。断面三角形の礫の稜を擦ったもので、断面が鋭角となる一辺を使用している。背腹両面にも弱い擦痕が見られる。4・5は石皿。4は破片で、両面が使用されている。5は比較的大型の扁平礫の上面が擦られている。6は板状礫。破碎した状態で出土した。表面が著しく剥落している。接合しなかった破片を含めて観察したが、使用痕や付着物などは認められなかった。(芝田直人)



図IV-3 包含層出土の石器等（1）



図IV-4 包含層出土の石器等(2)

表Ⅳ-1 層位別出土遺物点数一覧

分類	Ⅳ層			Ⅳa層		Ⅳb層	Ⅴ層	旧河道	表採	総計
	上位	中位	下位	上位	下位					
土器	I a			6						6
	I b-1					1				1
	I b-3		2	7			822	2	1	835
	Ⅱ a	8								8
	Ⅲ a	7			17					24
	Ⅲ b-3	3	1		2					6
	Ⅲ b (細分不明)	116	15			3				134
Ⅳ a	5	2							7	
小計	140	20	13	19	3	823	2	1	1,021	
石器	スクレイパー							2		2
	フレイク	2	1	1			3	1		8
	たたき石					1				1
	すり石						1			1
	石 皿		2	1			1			4
	板状礫	108								108
	礫・礫片	25		3			15		2	45
小計	135	3	5		1	20	1	4	169	
総計	275	23	18	19	4	843	3	4	1,190	

表Ⅳ-2 掲載土器一覧

掲載番号	分類	出土地点	遺物番号	層位	破片数			部位	文様・調整		備考
					接合	未接合	合計		外面	内面	
1	I a	G-6-b	4	Ⅳ下	6		6	口縁~胴部	貝殻腹縁文・貝殻条痕文・貝殻押引文・沈線文・円形刺突文	貝殻腹縁文・ナデ	物見合式相当 外面一部剥落
2	I b-1	F-6-d	4	Ⅳb	1		1	胴部	縄文(撚りの異なる原体)	条痕・ナデ	東銅路Ⅱ式相当
3a	I b-3	F-6-d	6・8	Ⅳb	38	281	327	口縁~胴部	細貼付帯・短縄文	擦痕・ミガキ	同一個体 内面に炭化物付着
3b					8			胴部			
4a	I b-3	F-6-d	6・8	Ⅳb	1	269	286	口縁部	細貼付帯・短縄文	擦痕・ナデ	同一個体 内面に炭化物付着
4b					3			胴部			
4c					6						
4d					7						
5	I b-3	F-6-b	4	Ⅳb	2		2	胴部	細貼付帯・短縄文	ナデ	内面に炭化物付着
6	I b-3	E-6-a	1	Ⅳb	9	6	15	底部	細貼付帯・斜行縄文	ナデ	内面一部剥落
		E-6-b	4								
7	I b-3	F-6-d	6	Ⅳb	4		4	底部	細貼付帯・斜行縄文	ナデ	
8	Ⅱ a	H-6-c	4	Ⅳ上	1	1	2	胴部	斜行縄文	斜行縄文	
9	Ⅲ a	H-7-a	1	Ⅳa上	1		1	口縁部	口唇に縄端の連続圧痕 斜行縄文	ナデ・指頭圧痕	
10	Ⅲ b-3	F-6-b	2	Ⅳ中	1		1	口縁部	篋状工具による押引文 斜行縄文	ナデ・指頭圧痕	
11a	Ⅲ b-3	E-6-a	3	Ⅳa上	1	1	1	口縁部	篋状工具による押引文 円形刺突文	ナデ	同一個体 磨滅
11b					1						
12	Ⅲ b-3	G-6-c	1	Ⅳ上	1		1	胴部	綾絡文・斜行縄文	擦痕・ナデ	
13	Ⅲ b-3	E-7-d	1	Ⅳ上	1		1	胴部	斜行縄文	擦痕・ナデ	
14	Ⅳ a	E-6-b	1	Ⅳ上	1		1	胴部	斜行縄文	ミガキ	外面一部剥落
15	Ⅳ a	F-7-d	1	Ⅳ中	1		1	胴部	斜行縄文	ミガキ	

表Ⅳ-3 掲載石器一覧

掲載番号	分類	出土地点	遺物番号	層位	法量 (cm)			重量(g)	石材	使用痕	備考
					最大長	最大幅	最大厚				
1	スクレイパー	D-6-a	1・2	旧河道	(4.20)	(2.68)	(0.91)	(9.50)	黒曜石	刃部の潰れ	2点接合、破損品
2	たたき石	E-6-a	5	Ⅳa下	(18.50)	9.80	9.78	(2,060.0)	安山岩	たたき痕2か所	加工痕あり、破損品
3	すり石	E-6-a	7	Ⅳb	(9.42)	(9.19)	(6.12)	(570.0)	流紋岩	すり痕3面	断面三角形、破損品
4	石 皿	E-6-a	6	Ⅳ中	(10.10)	(7.79)	(3.80)	(324.8)	凝灰岩	表裏面にすり痕	破片
5	石 皿	E-6-b	6	Ⅳ下	34.89	30.70	13.50	1,500.0	流紋岩	すり痕1面	
6	板状礫	F-6-b	1	Ⅳ上	(62.40)	(38.60)	(0.56)	(10,000.0)	凝灰岩	なし(剥落?)	6点接合(総点数108点、総重量11,480g)
		F-7-a									

V ま と め

平成15年度の調査区内で遺構は検出されなかったものの、遺物包含層等から土器1,021点、石器等169点が出土した。部分的にはあるが、縄文時代早期の遺物（中茶路式土器等）が駒ヶ岳gテフラ（Ko-g）より下位で出土する状況が確認された。以下、これまでの調査結果を踏まえて若干の考察を行い、まとめとする。

土 器

物見台式に相当する破片が出土した（図IV-2-1）。周辺では虎杖浜2遺跡でも出土している（工藤1999）。北海道南西部における当該期の資料は、函館市中野A遺跡で大量に得られており、「中野A式」が設定された（横山1979）。近年の調査結果をもとに器形・文様構成が細分され、類型化が試みられている（北埋文1992・1993）。胆振地方の太平洋沿岸では、伊達市の南稀府5遺跡（大沼他1983）、牛舎川右岸遺跡、稀府川遺跡（北埋文1990・1991）でも同時期の資料が報告されている。この他、苫小牧市有珠川2遺跡で樽前dテフラ（Ta-d）の下位（ⅢB層）より出土した、貝殻腹縁による押引文が施された土器群（道教委1979）が類似する。これらの例から貝殻文尖底土器が道南より噴火湾を越えて波及していたことが認められる。

平成10年度の調査で、「（貝殻）条痕文系土器群の古い時期」に伴うとされる「円孔文土器」が出土した（工藤1999）。これに類する、口縁部に円形刺突文を有する無文の土器が中野A遺跡で物見台式期の住居跡より出土し（北埋文1992）、有珠川2遺跡においても両者が同一層位内（ⅢB層）から出土している（道教委1979）。本遺跡では、地点は異なるがほぼ同じ層位で出土し、細砂礫が混入する胎土や焼成もよく似ており、物見台式といわゆる「円孔文土器」は同じか非常に近い時期の所産と考えられる。

中茶路式は、施文の特徴により、細貼付帯に厚みがあり、横走に加えて斜めあるいは縦方向に格子状となるもの（図IV-2-3）、口縁部から底部まで横走する、薄い細貼付帯のもの（図IV-2-4）に分けられる。前者は複雑に発達した細貼付帯を有することから、先行するコッタロ式よりの影響が強いと考えられる。後者は細貼付帯を廻らせた後、その間に地文となる短縄文や斜行縄文を施している。その際、意図的に細貼付帯を押し潰し、薄く扁平にしている。細貼付帯が退化し、簡素化していく過程にあると捉えることができる。平成10年度の資料にも同様の傾向が見られ、口縁部に中茶路式の要素（微隆起線文）を残し、胴～底部に東釧路IV式の特徴である羽状の撚糸文・縄文を施文した「過渡的様相を持つ」とされる一群も出土している。細貼付帯の押し潰しは一層顕著になり、痕跡が認められる程度になる。これらは最末期に位置すると考えられる。

以上のように、これまでの調査で本遺跡において得られた中茶路式は、大まかに3段階の変遷が想定される。ただし、いずれもほぼ同じ層位から出土しており、遺構等の層位に基く時期的検証を欠く。他遺跡の資料でも同様の変遷が辿れるかの検討が必要である。

石 器 等

板状礫が破碎した状態で出土した（図IV-4-6）。平成10年度に調査された集石1・3・5～11号は、石皿や大型礫を故意に破壊して1ヵ所に置いたもので、アイヌ民族の「送り」儀礼に類似した行為が行われたと推測されている（工藤1999）。集石と板状礫の出土状況を比較すると、集石は破片の大部分が散乱しているのに対して、板状礫はほぼ原型を留めている。明瞭な使用痕が見られないことから、運搬中または加工途中で破碎、そのまま廃棄された可能性もある。時期は出土層位や周辺の遺物などから縄文時代中期後半と考えられる。（芝田直人）

引用・参考文献

- 江坂輝弥 1950 「青森県下北郡東通村、尻屋、物見台遺跡調査報告」『考古学雑誌』36-4 日本考古学会
- 大川 清・鈴木公雄・工楽善通 1996 『日本土器事典』 雄山閣
- 大沼忠春・千葉英一・田才雅彦 1983 『南稀府5遺跡』 北海道文化財保護協会
- 大沼忠春 1986 「施文原体の変遷－東釧路式土器－」『季刊考古学』17 雄山閣
- 大場利夫・扇谷昌康・竹田輝雄 1962 「白老町虎杖浜遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』37 北海道大学
- 大場利夫・C.S.チャード 1962 「北海道先史文化の実年代について」『考古学雑誌』48-1 日本考古学会
- 岡田宏明 1977 『カムイエカンチャシ』 白老町教育委員会
- 岡田宏明 1978 『白老町虎杖浜2遺跡 1977年度試掘調査報告書』 白老町教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1996 『新版標準土色帖 17版』 日本色研事業株式会社
- 許 成基・山崎 誠・佐高裕之・中川昌巳・秋山泰裕・平野令緒 2001 「支笏火山噴出層年代の再検討」『地球科学』55巻 地学団体研究会
- 日下 哉 2002 『図解日本地形用語事典』 東洋書店
- 工藤 肇 1999 『虎杖浜2・ボンアヨロ4遺跡』 白老町教育委員会
- 熊谷仁志 1994 「縄文時代前半期－早期・前期・中期－」『北海道考古学』30 北海道考古学会
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1980 『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』 北埋調報1
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1983a 『虎杖浜3遺跡』 北埋調報11
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1983b 『川上B遺跡』 北埋調報13
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1985 『川上B遺跡・C地区』 北埋調報27
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990 『伊達市 牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡』 北埋調報61
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1991 『伊達市 牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡・谷藤川右岸遺跡』 北埋調報68
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992 『函館市 中野A遺跡』 北埋調報79
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1993 『函館市 中野A遺跡(Ⅱ)』 北埋調報84
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『美々・美沢－新千歳空港の遺構と遺物－』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2001 『虎杖浜2遺跡』 北埋調報158
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 『虎杖浜2遺跡(2)』 北埋調報172
- 佐藤一夫・工藤 肇 1980 「白老町発見の石刃鏃の新例について」『北海道考古学』16 北海道考古学会
- 沢 四郎・富永慶一 1966 「中茶路遺跡調査報告」『北海道白糠町の先史文化』1 白糠町教育委員会
- 白老町町史編纂委員会 1992 『新白老町史』上・下 白老町役場
- 末光正卓 2003 「白老町・文化財・発掘調査・思い出」『仙台藩白老元陣屋資料館報』第8・9合併号 仙台藩白老元陣屋資料館
- 高田寅雄 1985 「新、桑のささやき」『白老郷土文芸』5 第20回白老町文化祭実行委員会
- 高橋正勝 1980 『アヨロ 恵山文化の墓』 北海道先史学協会
- 地学団体研究会札幌支部 1984 『札幌の自然を歩く 第2版』 北海道大学図書刊行会
- 知里真志保・山田秀三 1958 「幌別町のアイヌ語地名について」『北方文化研究報告』33 北海道大学
- 富永勝也 1999 「縄文早期貝殻土器群の展開」『海峡と北の考古学－文化の接点を探る－』I 日本考古学協会釧路大会実行委員会
- 永田方正 1984 『初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版』 草風館
- 名取武光・峰山巖 1962 「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』37 北海道大学
- 西 幸隆 1994 「中茶路式土器」『縄文時代研究事典』 東京堂出版
- 西田 茂 1993 「ふたたび東釧路Ⅱ式土器について」『考古論集－潮見浩先生退官記念論文集－』 潮見浩先生退官記念事業会
- 西田 茂 1995 「東釧路Ⅱ式土器について」『北海道考古学』31 北海道考古学会
- ベドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック 改訂版』 博友社
- 北海道教育委員会 1979 『有珠川2・植苗3遺跡』 北海道教育委員会
- 松浦武四郎著・吉田常吉編 1962 『蝦夷日誌』 時事通信社
- 宮夫靖夫 1999 「東釧路土器の分類と編年について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』1 苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 山縣耕太郎 1994 「支笏およびクッタラ火山のテフロクロロジー」『地学雑誌』103 東京地学協会
- 横山英介 1979 『函館空港 中野遺跡』 みやま書房

写真図版



ポンアヨロ4遺跡

遺跡周辺の空中写真（1963年国土地理院撮影 撮影縮尺 1/20,000）

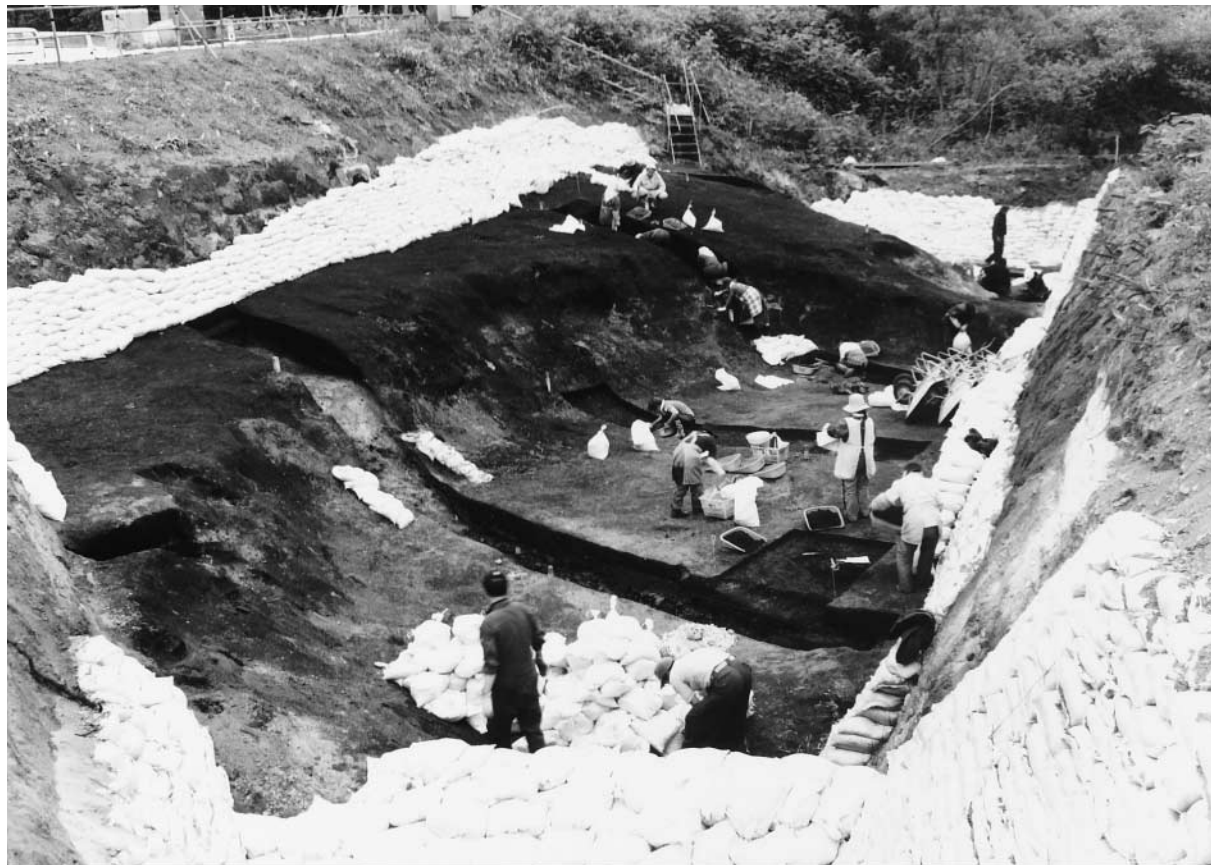
図版 2



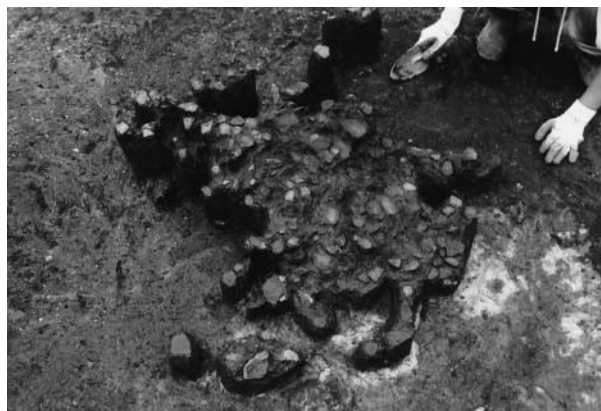
1. 調査区 (Us-b等除去後) 全景 (北西から)



2. 調査区 (Us-b等除去後) 全景 (南東から)



1. 調査状況（北西から）



2. IVb層土器出土状況（西から）



3. 板状礫出土状況（南から）



4. 台地部分（Iライン）土層断面（南東から）



5. 台地部分（Gライン）土層断面（南東から）

図版 4



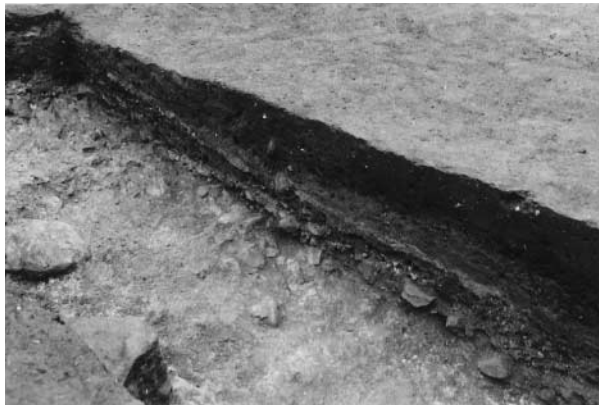
1. 氾濫原部分(1-5杭付近)土層断面(南東から)



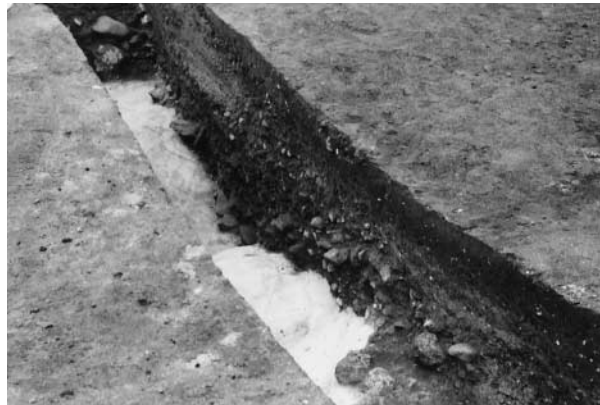
2. 氾濫原部分 (Iライン) 土層断面 (南西から)



3. 斜面～氾濫原部分(Gライン)土層断面(南西から)



4. Aトレンチ (北西から)



5. Cトレンチ (南東から)



6. Eトレンチ (南東から)



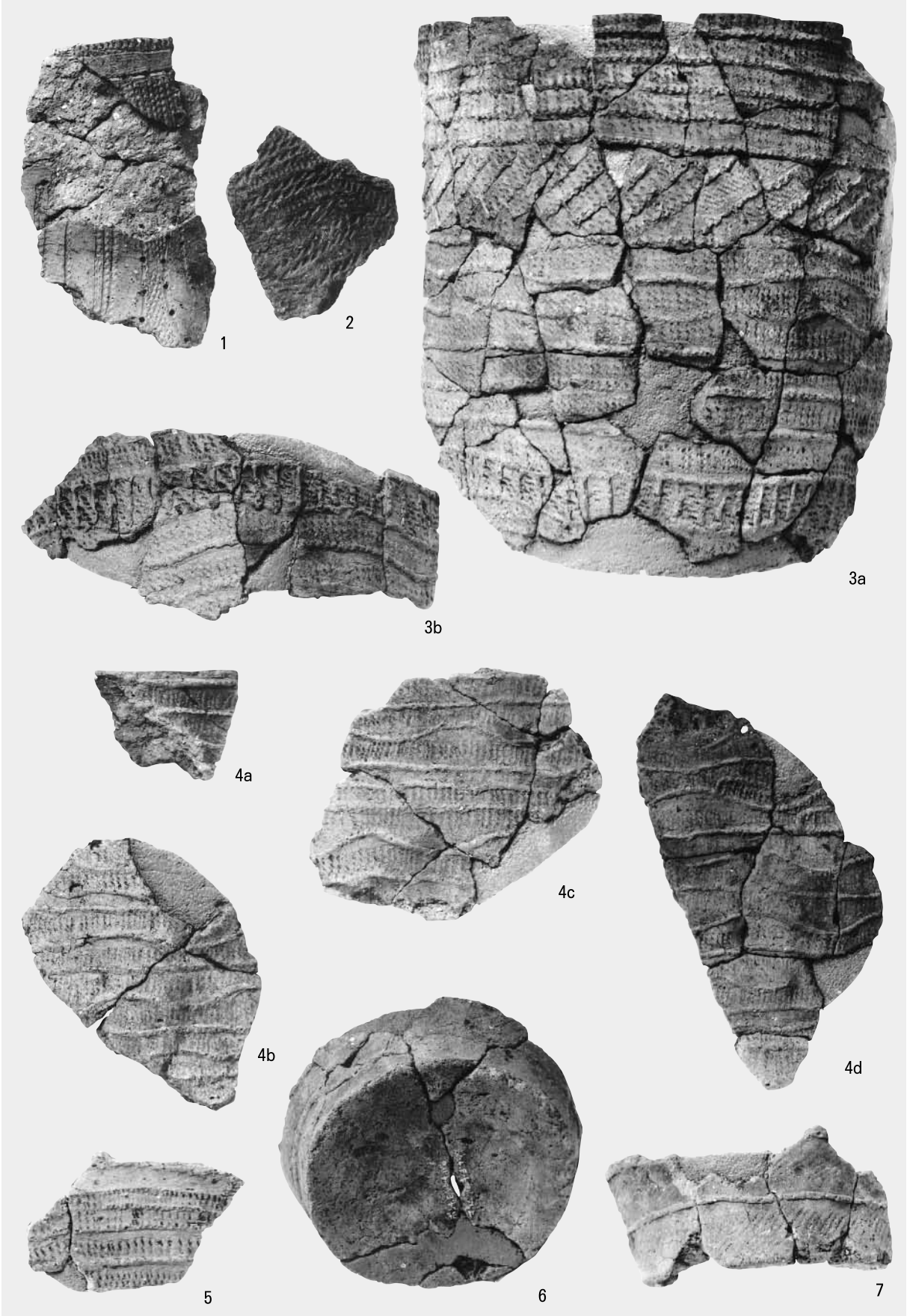
7. Fトレンチ (南東から)



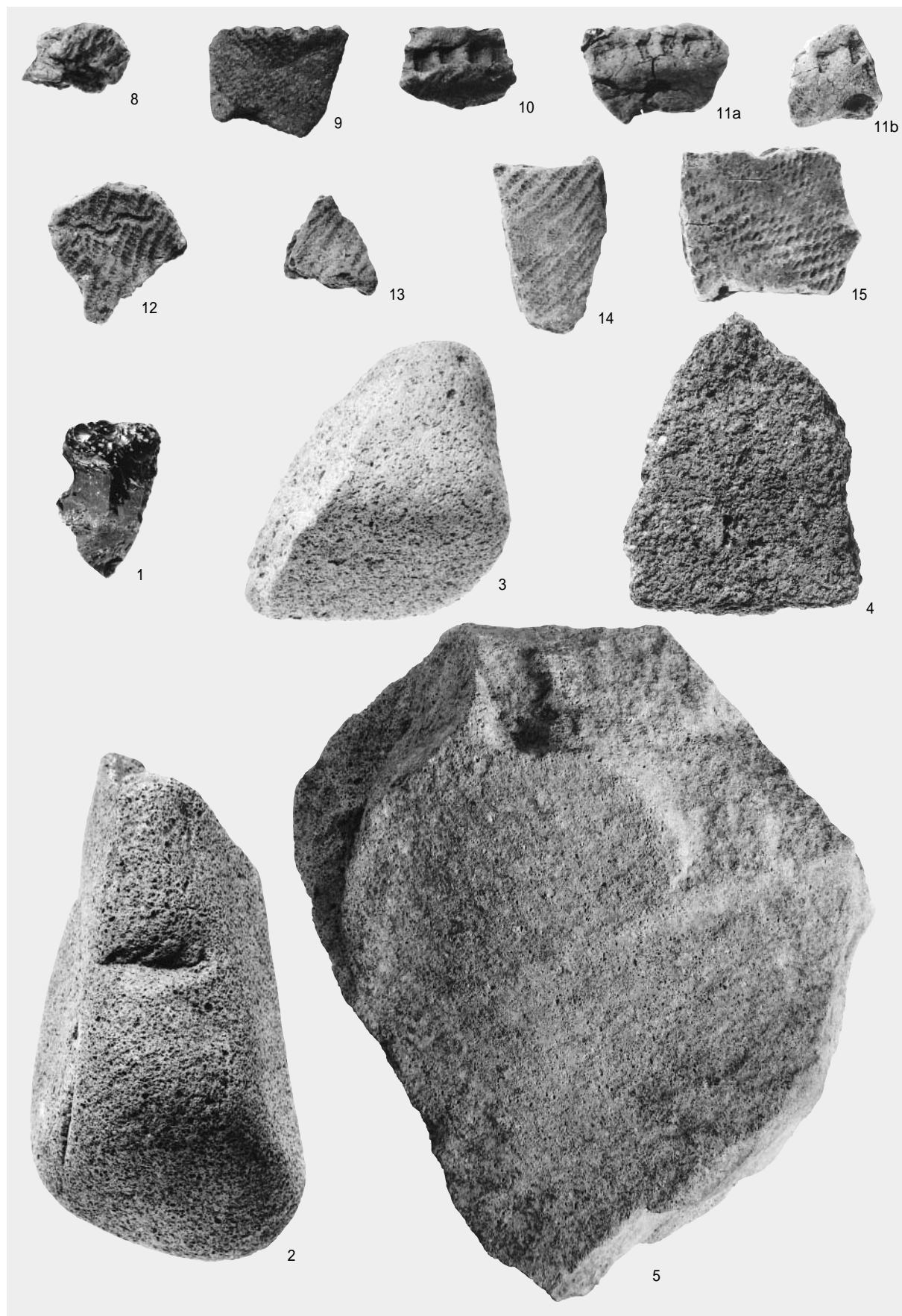
1. 調査区（調査終了後）全景（北西から）



2. 調査区（調査終了後）全景（南東から）



包含層出土の土器(1)



包含層出土の土器(2)・石器等(1)



包含層出土の石器等(2)

報告書抄録

ふりがな	しらおいちょう ぼん あ よろ よん い せ き							
書 名	白老町 ポンアヨロ 4 遺跡							
副 書 名	一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書(北埋調報)							
シリーズ番号	第200集							
編著者名	遠藤香澄・芝田直人・山中文雄							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地 1 TEL (011) 386-3231							
発行年月日	西暦2004年 3 月 4 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぼん あ よろ よん い せ き ポンアヨロ 4 遺跡	ほっかいどうしらおいぐん 北海道白老郡 しらおいちょうあぎこじょうはま 白老町字虎杖浜 335-27ほか	01578	J-10-41	42度 27分 21秒 (世界測地系)	141度 11分 26秒 (世界測地系)	20030609 ~ 20030718	284	道路建設 (一般国 道36号登 別市登別 拡幅工事) に伴う 事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ポンアヨロ 4 遺跡	集落跡	縄文時代 早期 中期		土器・石器等				

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第200集

白老町 **ポニアヨロ4遺跡**

一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月4日発行

編集・発行	財団法人 北海道埋蔵文化財センター 〒069-0832 江別市西野幌685番地1 TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238 URL http://www.domaiibun.or.jp Email mail@domaiibun.or.jp
印刷	株式会社 中央広版社 〒064-0826 札幌市中央区北6条西28丁目3番16号 TEL (011) 631-9339